

# CA Service Desk Manager

CA CMDB r12.7 および CA Configuration  
Automation r12.8 統合ガイド



このドキュメント（組み込みヘルプシステムおよび電子的に配布される資料を含む、以下「本ドキュメント」）は、お客様への情報提供のみを目的としたもので、日本 CA 株式会社（以下「CA」）により随時、変更または撤回されることがあります。

CA の事前の書面による承諾を受けずに本ドキュメントの全部または一部を複写、譲渡、開示、変更、複本することはできません。本ドキュメントは、CA が知的財産権を有する機密情報です。ユーザは本ドキュメントを開示したり、

(i) 本ドキュメントが関係する CA ソフトウェアの使用について CA とユーザとの間で別途締結される契約または(ii) CA とユーザとの間で別途締結される機密保持契約により許可された目的以外に、本ドキュメントを使用することはできません。

上記にかかわらず、本ドキュメントで言及されている CA ソフトウェア製品のライセンスを受けたユーザは、社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、当該ソフトウェアに関連する本ドキュメントのコピーを妥当な部数だけ作成できます。ただし CA のすべての著作権表示およびその説明を当該複製に添付することを条件とします。

本ドキュメントを印刷するまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、上記のライセンスが終了した場合には、お客様は本ドキュメントの全部または一部と、それらを複製したコピーのすべてを破棄したことを、CA に文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、CA は本ドキュメントを現状有姿のまま提供し、商品性、特定の使用目的に対する適合性、他者の権利に対して侵害のないことについて、黙示の保証も含めいかなる保証もしません。また、本ドキュメントの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の喪失等、いかなる損害（直接損害か間接損害かを問いません）が発生しても、CA はお客様または第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本ドキュメントで参照されているすべてのソフトウェア製品の使用には、該当するライセンス契約が適用され、当該ライセンス契約はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本ドキュメントの制作者は CA です。

「制限された権利」のもとでの提供：アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212、52.227-14 及び 52.227-19(c)(1)及び(2)、ならびに DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

Copyright © 2015 CA. All rights reserved. 本書に記載された全ての製品名、サービス名、商号およびロゴは各社のそれぞれの商標またはサービスマークです。

## CA Technologies 製品リファレンス

このマニュアルが参照している CA Technologies の製品は以下のとおりです。

- USDK Service Desk Manager (CA Service Desk Manager)
- CA CMDB (CA SDM のコンポーネント)
- CA Configuration Automation (旧称 CA Application Configuration Manager (CA ACM) )
- CA Business Intelligence

## CAへの連絡先

テクニカルサポートの詳細については、弊社テクニカルサポートの Web サイト (<http://www.ca.com/jp/support/>) をご覧ください。



# 目次

---

<b>第 1 章: はじめに</b>	<b>7</b>
このドキュメントの目的 .....	7
対象読者 .....	8
ハードウェアおよびソフトウェア要件 .....	8
統合の概要 .....	9
統合に関する考慮事項 .....	11
CA Cohesion CCA r5.0 MDR の非アクティブ化 .....	14
CA Configuration Automation r12.8 MDR の作成 .....	15
<b>第 2 章: 統合の構成</b>	<b>17</b>
統合をインストールおよび構成する方法 .....	17
統合パッチのインストール .....	20
BOXI_GRLoader プログラム オブジェクトのスケジュール .....	26
CA CMDB レポートのスケジュール .....	28
BOXI_GRLoader と CA CMDB エクスポート レポートに個別のインスタンスを構成する方法 .....	30
<b>第 3 章: カスタマイズ</b>	<b>33</b>
属性変換処理 .....	33
日本語プラットフォーム用の BOXI_GRLoader 引数 .....	35
属性変換のカスタマイズ .....	35
CA Configuration Automation と CMDB を統合するためのデータベース CI .....	43
属性マッピングと関係のカスタマイズ .....	45
acmbo_attrmapping テーブル .....	46
acmbo_classmapping テーブル .....	47
acmbo_relschpmapping テーブル .....	47
delete_flag を包含または除外するレポート XML のカスタマイズ .....	48
<b>第 4 章: 既知の問題</b>	<b>49</b>
CA Business Intelligence が、非デフォルト ポートを使用する SQL Server の名前付きインスタンスに接続できない .....	49
CA SDM への CMDB レポート エクスポートが失敗する .....	50
SQL Execute を実行できない .....	50
接続を開くことができない .....	52

---

動作に十分なメモリがない .....	53
電子メール通知が送信されない .....	55
CAFAApp.war の展開が失敗する .....	56
Oracle データベースを使用する CA Configuration Automation のアップグレードでのエラー .....	56
管理対象外サーバとの関係をエクスポートすると、GRLoader でエラーが発生する .....	57
仮想マシンとプロバイダの関係を抽出すると XML ファイルでエラーが発生する .....	57

## 付録 A: Appendix 59

ODBC システム DSN の作成 .....	60
BICONFIG ユーティリティでの BIAR ファイルのインポート .....	62
oledb.sbo ファイルの変更 .....	64
SQL Server の例 .....	65
Oracle の例 .....	65
インポート ウィザードでの BIAR ファイルのインポート .....	66
データベース接続の変更 .....	68
CA Business Intelligence での電子メールサーバおよびファイルシステムサーバの構成 .....	70
CA Business Intelligence でのプログラム オブジェクトの構成 .....	72
CA Business Intelligence で GRLoader 環境を構成する方法 .....	73
リモート MDR からの GRLoader の実行 .....	73
BOXI_GRLoader.jar の構成 .....	75
GRLoader プログラム オブジェクトのパラメータ .....	77
スクリプト .....	78

# 第1章：はじめに

---

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[このドキュメントの目的 \(P. 7\)](#)

[対象読者 \(P. 8\)](#)

[ハードウェアおよびソフトウェア要件 \(P. 8\)](#)

[統合の概要 \(P. 9\)](#)

[統合に関する考慮事項 \(P. 11\)](#)

## このドキュメントの目的

このドキュメントでは以下の情報を提供します。

- CA Business Intelligence r3.2 または r3.3 SP1 を使用して CA SDM r12.7 と CA Configuration Automation r12.8 を統合する方法。  
*注:* 環境内にある CA Business Intelligence の任意のインスタンスを使用できますが、CA Configuration Automation レポートの展開先のインスタンスを使用することをお勧めします。
- 統合パッチをインストールおよび構成する方法。
- CA Business Intelligence r3.2 または r3.3 SP1 で CA CMDB エクスポート レポートおよび GRLoader を構成および使用して、CA Configuration Automation からデータを抽出、変換し、CA CMDB にロードする方法。
- システム要件
- インストール時の注意事項

この統合により、変更影響度分析および根本原因解析のために CA Configuration Automation から CA CMDB に構成アイテム (CI) データをエクスポートできます。CA Configuration Automation r12.8 は、標準の CA Business Intelligence レポートエンジンを使用するようになっています。したがって、統合を問題なく完了するには、CA Business Intelligence r3.2 または r2.3 SP1 に CA CMDB エクスポート レポートが必要です。

## 対象読者

このドキュメントには、CA SDM r12.7 の CA CMDB モジュールで重要な CA Configuration Automation r12.8 データを利用するため CA Business Intelligence r3.2 または r3.3 SP1 を構成する管理者のための情報が記載されています。このドキュメントでは、読者が以下のプロセスに精通していることを前提としています。

- レポートのスケジュール設定、BusinessObjects グループへのユーザの追加、FTP などの宛先をサポートするためのデスティネーションサーバの構成、イベントの作成と使用など、CA Business Intelligence 管理タスクを実行する方法。

**注:** レポートのスケジュール設定およびデスティネーションサーバの構成の詳細については、「CA Business Intelligence 管理ガイド」を参照してください。

- GRLoader.jar および ApplyPTF ユーティリティを使用する方法  
**注:** GRLoader の使用方法の詳細については、「CA CMDB テクニカル リファレンス ガイド」を参照してください。
- Windows および UNIX プラットフォームでシステム管理を実行する方法。

## ハードウェアおよびソフトウェア要件

CA Business Intelligence (BusinessObjects XI) r3.2 または r3.3 SP1、CA SDM r12.7、および CA Configuration Automation r12.8 は、多くのハードウェア、ソフトウェア、オペレーティングシステム、およびデータベースをサポートします。CA Technologies はコンポーネントのライフサイクル期間中(製造元が定める)、または CA Technologies がサポートの中止を決定するまで、各コンポーネントをサポートします。

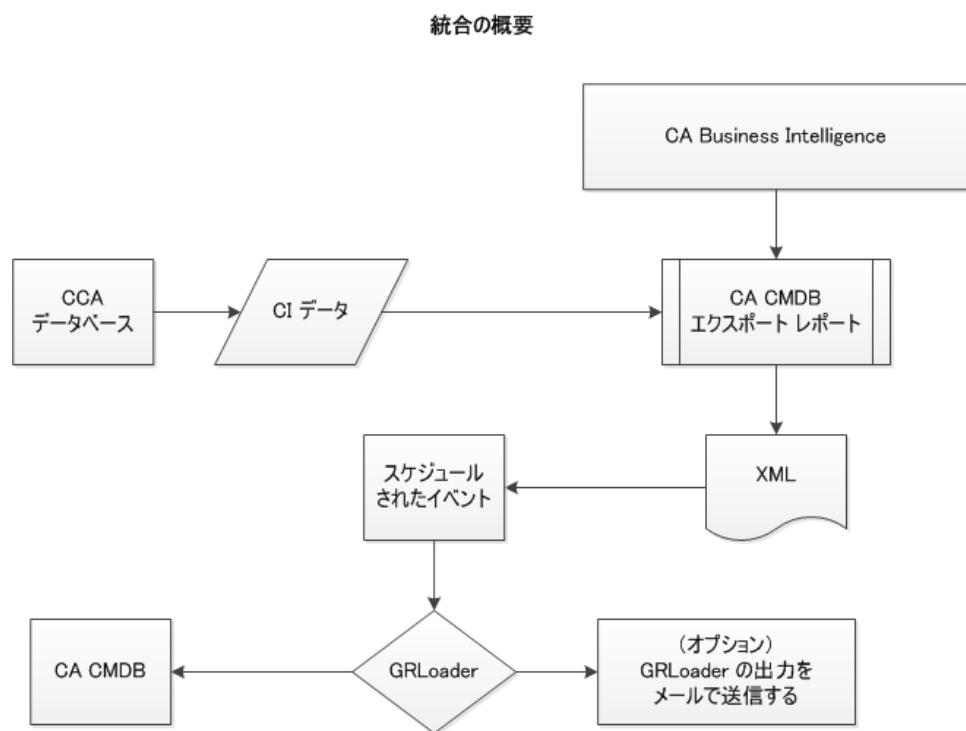
**注:** ハードウェア、ソフトウェア、オペレーティングシステム、データベースの要件に関する詳細については、CA Business Intelligence r3.2 または r3.3 SP1、CA SDM r12.7、および CA Configuration Automation r12.8 のサポートされるプラットフォームのドキュメントを参照してください。

## 統合の概要

CA Business Intelligence r3.2 または r3.3 SP1 では、CA SDM r12.7 の CA CMDB コンポーネントと CA Configuration Automation r12.8 を統合できます。CA Business Intelligence で展開される CA CMDB エクスポートレポートは、CA Configuration Automation の情報を含む XML ファイルを提供します。このファイルは、GRLoader を使用して CA CMDB にロードされます。CA CMDB のユーティリティである GRLoader を使用すると、管理データベース (MDB) の CI とその関係を作成または更新できます。GRLoader は、CA CMDB のファミリ、クラス、関係を GRLoader を介して CA Configuration Automation のオブジェクトタイプにマップします。CA SDM r12.7 は GRLoader を自動的にインストールします。

**重要:** この統合が正しく動作するには、CA Business Intelligence をインストールする必要があります。

以下では、統合の動作方法の概要を説明と図で示します。



1. CA Configuration Automation は、サーバ CI、NIC CI、コンポーネント CI、ハード ドライブ CI などの CI および CI 関係を検出します。

2. CA CMDB エクスポート レポートを CA Business Intelligence に展開して、CA Configuration Automation データベースから CI データを抽出します。

3. XML 形式の CI データがロードできる状態になった際に生成されるイベントを待機するように GRLoader ユーティリティをスケジュールします。

GRLoader は CA Configuration Automation から CA CMDB に XML データをロードします。

4. デスティネーションへの CA CMDB エクスポート レポートをスケジュールします。

GRLoader はこのデスティネーションを使用して、XML ファイルが正常に生成されると発生するイベントを待ち、CA CMDB にそれをロードします。

注: GRLoader はデフォルトでは電子メール通知を送信しませんが、必要に応じて、指定したユーザに通知を送信するようデスティネーション サーバの電子メールまたはファイルシステムを構成できます。BOXI\_GRLoader のスケジュールが正常に行われると、出力が電子メール通知としてユーザに送信されます。

統合を完了した後は、CA CMDB からの CI のコンテキストで CA Configuration Automation を起動できます。CA CMDB の CI の詳細を確認し、CA SDM r12.7 で構成した URL から CA Configuration Automation を起動します。

## 統合に関する考慮事項

統合を開始する前に、以下の情報を考慮します。

- これまで CA Cohesion 製品を使用してきた場合、CA Cohesion ACM r5.0 と CA Configuration Automation r12.8 はアーキテクチャが異なる別の製品です。これら 2 つの製品が検出するデータも異なる可能性があります。CA Cohesion ACM r5.0 システムから CA Configuration Automation r12.8 システムに移行した後、重複するデータが CA CMDB に作成される可能性があります。このような重複を管理するには、CA CMDB TWA、CMDB 不明確性インデックス機能、および CMDB の他の高度な調整機能を使用します。
- CA Business Intelligence r3.2 または r3.3 SP1、CA Service Desk Manager r12.7、CA Configuration Automation r12.8 を正しくインストールし、構成しておきます。

**重要:** 統合インストーラを実行する前に、CA Configuration Automation を r12.8 にアップグレードする必要があります。

**注:** CA Configuration Automation r12.8 レポートを展開した CA Business Intelligence インスタンスを使用することを推奨しますが、必要であれば、異なる CA Business Intelligence インスタンスにこの統合を構成してもかまいません。

- CA Cohesion ACM r5.0 は、完全修飾ドメインなしでサーバ名を格納する場合があります。CA Configuration Automation r12.8 は、常に完全修飾ドメイン名付きでサーバ名を格納します。このような場合、CI が CA Configuration Automation r12.8 からインポートされた後、CA CMDB に重複が発生する可能性があります。この状況を回避するには、管理者は Cohesion r5.0 ですべての Cohesion r5.0 サーバ名を（ドメイン付きの）完全修飾サーバ名に手動で変更します。これらのタスクを完了した後、Cohesion r5.0 で CA CMDB エクスポート レポートを再度実行し、すべての CI およびその関係を抽出して CA CMDB にインポートします。または、TWA を使用して Cohesion r5.0 から CI 情報を格納し、SQL スクリプトを実行してレコードの system\_name フィールドを完全修飾ドメイン名に変更します。この手順の後、レコードを CA CMDB にインポートできます。

- CA Configuration Automation r12.8 に移行する場合は、CA Cohesion ACM r5.0 の管理データ リポジトリ (MDR) を非アクティブ化しておきます。

**重要:** CA Configuration Automation r12.8 MDR に変換するには、以前の CA Cohesion ACM r5.0 MDR の定義を変更しないでください。 r5.0 MDR を非アクティブ化し、新しい r12.8 MDR 定義を作成して、未使用リソースのクリーンアップを有効にする必要があります。

**注:** CA Cohesion ACM r5.0 と CA Configuration Automation r12.8 の両方をアクティブな MDR として保持する場合は、CA Cohesion ACM r5.0 MDR を非アクティブにしないでください。

- CA Configuration Automation r12.8 用の MDR を作成し、アクティブにしておきます。

**注:** この MDR では、CA CMDB から CA Configuration Automation CI を起動するための URL を定義します。

**注:** CA CMDB がインストールされていないリモートシステムから GRLoader を実行する場合は、付録を参照してください。

- SQL Server または Oracle クライアントを CA Business Intelligence システムにインストールしておきます。

- 以下のファイルが含まれる統合パッチをダウンロードしておきます。

### CCA\_CMDB\_Report.biar

CCA to CMDB Export Group、CA CMDB エクスポート レポート、  
BOXI\_GRLoader.jar ファイル、CA Business Intelligence ユニバース、  
およびユニバース接続を含みます。CA Business Intelligence が存在  
するコンピュータにこのファイルをインポートします。

**重要:** CA CMDB エクスポート レポートの実行を担当する (CA Business Intelligence の) ユーザを [CCA to CMDB Export Group] に追加する必要があります。このグループに追加されたユーザは、BIAR ファイルをインポートするときに CA CMDB エクスポート レポート、CCA\_CMDB ユニバース、およびCCA\_CMDB 接続へのアクセスに対するフルコントロール権があります。ユーザを CA Business Intelligence のグループに追加する詳細については、CA Business Intelligence r3.2 または r3.3 SP1 の管理ガイドを参照してください。

### CCA\_CMDB\_DBSCRIPTS\_MSSQL.zip

必要なテーブル、ビュー、および必要なテーブルを設定するための挿入ステートメントを作成する SQL Server スクリプトが含まれています。CA Configuration Automation データベースに対してこれらのスクリプトを実行します。

**CCA\_CMDB\_DBSCRIPTS\_ORCL.zip**

必要なテーブル、ビュー、および必要なテーブルを設定するための挿入ステートメントを作成する Oracle スクリプトが含まれています。CA Configuration Automation データベースに対してこれらのスクリプトを実行します。

**CAFApp.war**

CA CMDB エクスポート レポート用のプロンプト ページを生成するために CA Business Intelligence によって使用される Web アプリケーション サーバに展開する WAR ファイルを指定します。このファイルは、CA Business Intelligence アプリケーション サーバのたとえば *%BusinessObjects%/tomcat/webapps* フォルダに展開されます。

**CAFApp.xml**

展開される WAR ファイルの構成ファイルを指定します。このファイルは CA Business Intelligence サーバの *%BusinessObjects%/cacaf* フォルダに展開されます。

(オプション) [GRLoader 環境変数](#) (P. 73)を構成する場合、以下のシナリオを考慮します。

- CA Business Intelligence で GRLoader を実行しない場合は、CA CMDB エクスポート レポートをスケジュールし、レポートで生成された XML ファイルを CA CMDB コンピュータにコピーして、GRLoader を手動で実行します。
- CA CMDB と CA Business Intelligence が同じコンピュータにインストールされていない場合は、GRLoader をリモートで実行して CA Business Intelligence コンピュータに GRLoader を構成し、*BOXI\_GRLoader* を構成して GRLoader を実行するようにプログラム オブジェクトをスケジュールします。
- CA CMDB と CA Business Intelligence が同じコンピュータ上にある場合は、*BOXI\_GRLoader.jar* を構成します。

## CA Cohesion CCA r5.0 MDR の非アクティブ化

CA Configuration Automation から CA CMDB に CI および関係をインポートする場合で、CA Cohesion ACM r5.0 をすでに使用している場合は、CA SDM の CA Cohesion ACM r5.0 MDR を非アクティブにします。

**注:** これを行うと、CA Cohesion ACM r5.0 のフェデレートされた CI マッピングがすべて非アクティブになります。 [環境管理] タブの [統一 CI マッピング] ノードで統一 CI マッピング リストを確認してください。

**重要:** CA Cohesion ACM r5.0 と CA Configuration Automation r12.8 の両方をアクティブな MDR として保持する場合は、r5.0 MDR を非アクティブにしないでください。 CA Configuration Automation r12.8 からインポートされた CI は、CA Cohesion ACM r5.0 からインポートされた既存の CI と調整されます。 CA Configuration Automation r12.8 および CA Cohesion ACM r5.0 からインポートされた両方の CI の MDR が、CI 詳細ページに MDR ボタンとして表示されます。

次の手順に従ってください:

1. [環境管理] タブで、[CA CMDB] - [MDR 管理] - [MDR リスト] に移動します。  
[MDR リスト] が表示されます。
2. 非アクティブにする MDR を開き、[編集] をクリックします。  
[MDR 定義の更新] ページが表示されます。
3. [アクティブ] ドロップダウン リストで [非アクティブ] を選択し、[保存] をクリックします。  
MDR が非アクティブになります。

## CA Configuration Automation r12.8 MDR の作成

CI および関係を CA Configuration Automation サーバから CA CMDB にインポートする前に、CA Configuration Automation MDR を定義します。

以下の手順例の XML では、MDR 名は *localhost*、MDR クラスは *CCA r12.8* と指定されています。これらの値は、CI をインポートする前に必要です。

次の手順に従ってください：

1. CA SDM の [環境管理] タブで、[CA CMDB] - [MDR 管理] - [MDR リスト] に移動します。  
[MDR リスト] が表示されます。
2. [新規作成] をクリックします。  
[MDR 定義の新規作成] ページが表示されます。
3. 例として、フィールドに次の値を入力します。
  - ボタン名 — ボタンのラベルを入力します（例： **CCA-R12.8**）。
  - MDR 名 — CA Configuration Automation サーバのローカルホスト名を入力します（例： **myccaserver**）
  - MDR クラス — 「**CCA r12.8**」と入力します。
  - アクティブ — ドロップダウンリストから [アクティブ] を選択します。
  - 所有者 — 「**CMDBAdmin**」と入力します。
  - 説明 — サーバについて説明を入力します（例： シカゴの CCA サービス）。
  - ホスト名 — CA Configuration Automation サーバのホスト名を入力します（例： **cca\_server**）。
  - ポート — CA Configuration Automation サーバのポートを入力します（例： **8080**）。
  - パス — CA Configuration Automation サーバの URL パスを入力します（例： **cca/CCAUUI.html**）。

<http://<ホスト名>:port/cca/CCAUUI.html>

- パラメータ — パラメータを、**type=ci{federated\_asset\_id}** の形式で入力します。

CA Configuration Automation は、CA CMDB の **federated\_asset\_id** を次の文字列で設定します。

**&objtype=object type&name=name&component=component name&path=comp\_qualifier**

オブジェクトタイプ、名前、コンポーネント名の値は CA Configuration Automation オブジェクトに固有です。次にパラメータの例を示します。

`type=ci&objtype=server&name=myserver.ca.com&component=Cohesion%20Server`

- コンテキストで起動する URL — 「**http://{hostname}:{port}/{path}?{parameters}**」と入力します。

注：（オプション） URL 構文を変更して、特別な要件に対応することができます。

URL の例を次に示します。

`http://myccaserver:8080/cca/CCAUI.html?type=ci&objtype=server&name=myserver.ca.com&component=Cohesion%20Server`

### 4. [保存] をクリックします

MDR が作成されます。

# 第2章：統合の構成

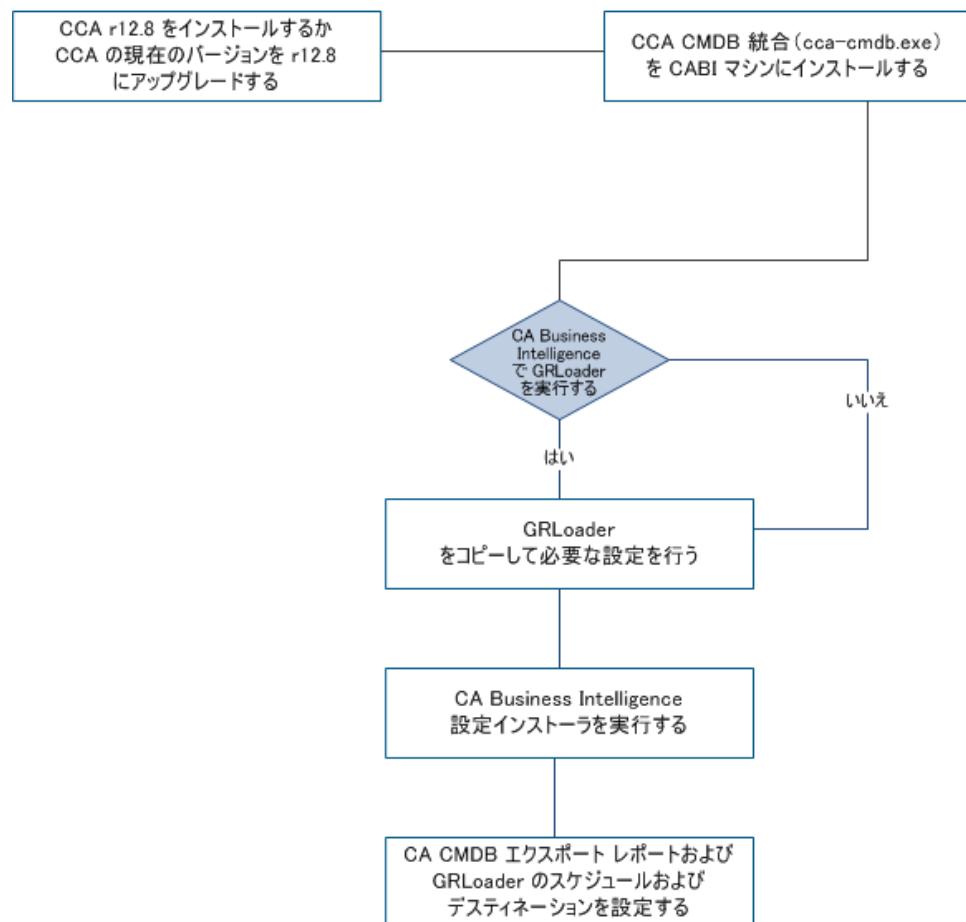
このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[統合をインストールおよび構成する方法 \(P. 17\)](#)

## 統合をインストールおよび構成する方法

以下の情報および図では、CA SDM r12.7 と CA Configuration Automation r12.8 を統合するために CA Business Intelligence で CA CMDB エクスポート レポートを構成する方法の概要を説明します。

### 統合のインストールおよび設定方法



1. CA Configuration Automation r12.8 をインストールするか、または CA Configuration Automation の現在のバージョンを r12.8 にアップグレードします。
2. (オプション) 統合パッチインストーラを起動する前に、リモート MDR から GRLoader を実行します。
3. CA Business Intelligence がインストールされているコンピュータ上の CA Configuration Automation CMDB 統合パッチディストリビューションの `dvd1` ディレクトリから統合パッチインストーラを起動し (`cca-cmdb.exe`) 、インストーラの手順に従います。

注: インストーラには、JRE のバージョン 1.5 以上が必要です。サーバで PATH 環境変数を `jre¥bin¥` に設定する必要があります。
4. インストーラは以下のタスクを実行します。
  - a. BOXI\_GRLoader プログラム オブジェクト、CCA から CMDB へのグループ、CA Configuration Automation r12.8 データベースのデータソースとして SQL Server または Oracle をサポートする CA CMDB エクスポート レポートを含む BIAR ファイルをインポートします。このファイルには、CA Business Intelligence ユニバースおよび接続プロパティも含まれます。このレポートは、CA Configuration Automation データベースからデータを抽出し、XML 形式でそれを提供します。
  - b. CA Business Intelligence サーバに Client Access Framework (CAF) ページ WAR ファイルを展開します。CAF は、CA CMDB エクスポート レポートに必要なレポートパラメータをキャプチャするレポート用のプロンプト ページを提供します。

- c. (オプション) エクスポート レポートに関する通知を受け取るユーザを指定する電子メール サーバおよびファイル サーバを構成します。

**注:** 通知を設定しないで、成功したインスタンスの出力を表示するには、CA Business Intelligence でオブジェクトの履歴を見てください。インスタンスタイトルをクリックし、任意のテキストエディタを使用して出力を開きます。オプションとして、このインストールの間に構成しなかった場合は、CA Business Intelligence で電子メール サーバおよびファイル システム サーバを構成 (P. 70) できます。

- d. (オプション) CA Business Intelligence でプログラム オブジェクトを構成します。

プログラム オブジェクトは、レポートを実行し、レポートおよびデータ エクスポートをスケジュールする JAR ファイルを追加できるようにするスクリプトを提供します。

5. CA Business Intelligence で BOXI\_GRLoader プログラム オブジェクトをスケジュールします。

6. CA Business Intelligence で CA CMDB エクスポート レポートをスケジュールします。

GRLoader は、レポートから生成された XML ファイルを取得し、CA CMDB にデータをロードします。

#### 関連項目:

[CA Business Intelligence で GRLoader 環境を構成する方法](#) (P. 73)

### 統合パッチのインストール

CA Configuration Automation CMDB 統合インストーラ (*cca-cmdb.exe*) を使用して、CA Configuration Automation データベース接続構成や CA Business Intelligence の構成などの統合コンポーネントをインストールします。

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- JRE バージョン 1.5。 サーバで PATH 環境変数を *jre\bin* に設定します。
- JDK バージョン 1.6.x ~ 1.7.x。 JAVA\_HOME システム環境変数を設定します。たとえば、JDK1.6 を C:\Program Files にインストールする場合は、JAVA\_HOME 変数の値を C:\Program Files\Java\jdk1.6 に設定します。また、JAVA\_HOME パスの設定を PATH 環境変数の最後に追加します（既存のパス）;%JAVA\_HOME%\bin）。

**重要:** 接続の問題のため、JDK バージョン 1.6.0\_29 はインストールしないでください。

**重要:** インストールを完了した後、CA Business Intelligence アプリケーションサーバサービス（Tomcat など）およびサーバインテリジェンスエンジントを再起動します。アプリケーションサーバサービスを再起動する前に、CAFApp フォルダを CA Business Intelligence の webapps ディレクトリ（例：C:\Program Files\CA\SC\CommonReporting3\Tomcat55\webapps）から削除します。

**重要:** CA Configuration Automation サーバが Oracle データベースを使用する場合、Oracle 管理者クライアントを CA Business Intelligence コンピュータにインストールします。これにより、CA Business Intelligence は CA Configuration Automation データベースと通信できるようになります。また、CA Configuration Automation データベースを指す「CCA」という名前のエンティリを TNS リスナに追加します。CA Business Intelligence は、Oracle データベースに接続するためのデータソース名として、この名前を使用します。これらの手順を実行しない場合、Oracle での CA CMDB エクスポートレポートの実行は失敗します。

CA Business Intelligence 3.3 SP1 をインストールする場合は、Tomcat6 または Tomcat7 ディレクトリの PATH に基づく webapps ディレクトリを選択します。

例：

- C:\Program Files\CA\SC\CommonReporting3\Tomcat6\webapps
- C:\Program Files\CA\SC\CommonReporting3\Tomcat7\webapps

次の手順に従ってください:

1. CA Business Intelligence がインストールされているコンピュータでインストーラ (cca-cmdb.exe) を起動します。  
CCA CMDB 統合の開始ページが表示されます。
2. [次へ] をクリックします。  
[CCA データベース サーバ] ページが表示されます。
3. [データベース タイプ] ドロップダウンリストから CA Configuration Automation データベース (SQL Server または Oracle) を選択し、以下のフィールドに入力して、[次へ] をクリックします。

#### サーバ名

CA Configuration Automation データベースがインストールされているサーバの名前または IP アドレスを指定します。IPv6 アドレスについては、最大拡張形式のアドレス、および最大圧縮形式のアドレスがサポートされています。IPv6 のリンク ローカル アドレスはサポートされていません。

#### ポート番号

データベースのリスニング ポート番号を指定します。デフォルトをそのまま使用するか、またはデータベース ソフトウェアをインストールしたときに、ベンダーが推奨するデフォルトのポート番号を使用しなかった場合は別のポート番号を入力します。

**SQL Server のデフォルト : 1433**

**Oracle のデフォルト : 1521**

#### インスタンス名(オプション)

(SQL Server のみ) データベース インスタンス名を指定します。

#### サービス名

(Oracle のみ) Oracle データベース システム識別子 (インスタンス名) を指定します。

[CCA データベース構成] が表示されます。

4. 対応するフィールドに以下の情報を入力し、[次へ] をクリックします。

### データベース名

CA Configuration Automation データベース名を指定します。

### データベース ユーザ

CA Configuration Automation データベース スキーマを更新する権限を持つユーザ名を指定します。

### データベース ユーザ パスワード

前のフィールドで指定した CA Configuration Automation データベース ユーザのパスワードを指定します。

**注:** パスワードを再度入力し、正しく入力したことを確認します。

インストーラは、データベースに接続してデータベース詳細を確認し、CMDB パッチ インストーラを使用してアップグレードされたことを確認します。

**注:** 検証が失敗した場合、CA CMDB エクスポート レポートを構成する前に CA Configuration Automation をアップグレードするように、エラーメッセージで指示されます。

[CABI フォルダの選択] ページが表示されます。

5. [選択] をクリックし、以下の例のような CA Business Intelligence インストールディレクトリを参照して、[次へ] をクリックします。

C:\Program Files\CA\SC\CommonReporting3

[CABI webapps フォルダの選択] ページが表示されます。

6. [選択] をクリックし、CA Business Intelligence webapps ディレクトリを参照して、[次へ] をクリックします。

■ 例 :

■ C:\Program Files\CA\SC\CommonReporting3\Tomcat6\webapps

■ C:\Program Files\CA\SC\CommonReporting3\Tomcat7\webapps

[CABI の構成] ページが表示されます。

- 以下の認証情報を入力して、[次へ] をクリックします。

**サーバ名**

BusinessObjects レポート サーバの名前を指定します (localhost など)。

**ポート**

CA Business Intelligence レポート サーバのリスニング ポートを指定します。

デフォルト : 6400

**管理者**

CA Business Intelligence レポート サーバ管理者のユーザ名を指定します。

デフォルト : Administrator

**管理者パスワード**

CA Business Intelligence 管理者のパスワードを指定します。

注: パスワードを再度入力し、正しく入力したことを確認します。

**システム ユーザ名**

ファイルシステム、プログラム オブジェクト、および  
BOXI\_GRLoader (ユーザがインストールの間にこれらのオプション  
を選択した場合) オブジェクトのユーザ名を構成するシステム  
ユーザ名を指定します。

**システム パスワード**

ファイルシステム、プログラム オブジェクト、および  
BOXI\_GRLoader (ユーザがインストールの間にこれらのオプション  
を選択した場合) オブジェクトのパスワードを構成するシステム  
ユーザのパスワードを指定します。

注: パスワードを再度入力し、正しく入力したことを確認します。

[電子メールの構成] ページが表示されます。

2. (オプション) 以下のフィールドを入力して、*CrystalReportJobServer*、*ProgramJobServer*、*DestinationJobServer* の電子メール通知の宛先を構成した後、[次へ] をクリックします。

電子メール通知 :

**ドメイン名**

電子メールサーバのドメイン名を指定します。

**ホスト名**

電子メールサーバのホスト名を指定します。

**宛先アドレス**

レポートが実行されたときに電子メール通知を受け取るユーザの電子メールアドレスを指定します。セミコロン (;) で区切ることにより、追加の電子メールアドレスを指定できます。

**送信者アドレス**

レポートが実行されたときに電子メール通知を送信するユーザの電子メールアドレスを指定します。

**件名**

レポートが実行されたときに送信される電子メールの件名を指定します。

**注:** インストール時に構成しなかった場合、または後で特定のレポートインスタンスに対して構成する場合は、CA Business Intelligence で手動により [電子メールサーバおよびファイルシステムサーバを構成 \(P. 70\)](#) できます。

[FTP の構成] ページが表示されます。

3. (オプション) 以下のフィールドを入力して、サーバ *CrystalReportJobServer*、*ProgramJobServer*、*DestinationJobServer* の FTP 通知を構成した後、[次へ] をクリックします。

**FTP ホスト**

FTP ホスト名を指定します。

**FTP ポート**

FTP ポートを指定します。

**ユーザ名**

FTP ホストに接続するためのユーザ名を指定します。

**パスワード**

FTP ホストに接続するためのパスワードを指定します。

**注:** パスワードを再度入力し、正しく入力したことを確認します。

**FTP アカウント**

FTP アカウントを指定します。

**デスティネーション ディレクトリ**

FTP サーバの特定の場所に出力を送信します。

**ファイル名**

レポートファイル (XML) のファイル名を指定します。

4. (オプション) 以下のフィールドを入力して、サーバ *CrystalReportJobServer*、*ProgramJobServer*、*DestinationJobServer* のファイルシステム通知を構成した後、[次へ] をクリックします。

**ファイル デスティネーション ディレクトリ**

ローカル CA Business Intelligence ファイルシステムの特定の場所に出力を送信します。

**User Specific File Name**

.XML 形式で指定したファイル名でレポートファイルを作成します。

**CABI\_GRLoader** ページが表示されます。

5. (オプション) インストーラで **GRLoader** プログラム オブジェクトパラメータを設定する場合は、以下の詳細を入力します。

**GRLoader 引数**

**GRLoader** の引数 (プログラム オブジェクトパラメータ) を指定します。

**作業ディレクトリ**

**GRLoader** が **GRLoader** バイナリをコピーする作業ディレクトリを指定します。

6. サマリを確認した後、[インストール] をクリックします。  
インストーラは、統合インストールが正常に完了したことを表示します。
7. [完了] をクリックします。  
インストーラが閉じます。

## BOXI\_GRLoader プログラム オブジェクトのスケジュール

CA Business Intelligence で BOXI\_GRLoader プログラム オブジェクトをスケジュールする前に、適切なパラメータを設定します。これらのパラメータを設定することで、プログラム オブジェクトを正しくスケジュールできます。パッチインストールの間に BOXI\_GRLoader プログラム オブジェクトを更新するか、または手動で構成します。

### BOXI\_GRLoader プログラム オブジェクトをスケジュールする方法

1. CMC または InfoView にログインし、以下のディレクトリを参照します。  
**InfoView**  
¥Public Folders¥CA Reports¥CCA to CMDB  
**CMC**  
¥Folders¥All Folders¥CA Reports¥CCA to CMDB
2. BOXI\_GRLoader プログラム オブジェクトを右クリックし、[Schedule] を選択します。  
[Schedule] ページが表示されます。
3. 以下の手順に従います。
  - a. インスタンスのタイトルを入力します。
  - b. 左ペインから [Recurrence] を選択し、[Now]、[Hourly]、[Daily] など、適切なオプションを設定します。
  - c. BIAR ファイルのインストールとインポートの間に指定されたデフォルト値をリスト表示するプログラム パラメータ オプション (引数) を選択します (-cfg C:¥conf.txt のデフォルト コマンドラインを含む場合があります)。  
注: GRLoader に渡すことができる引数の詳細については、「*CA CMDB r12.7 テクニカルリファレンス ガイド*」を参照してください。

- d. CA CMDB コマンド オプション (引数) を *conf.txt* によって設定する場合は、作業ディレクトリ、実行するクラス、クラスパス プログラム パラメータに関連性があることを確認します。*conf.txt* ファイルの例を次に示します。

```
grloader.userid=ServiceDesk  
grloader.password=Service@123Desk  
grloader.server=http://CASDMhostname:8088  
grloader.inputfile=c:/GrLoader/XML/cmdbexport.xml  
grloader.errorfile=c:/GrLoader/XML/cmdbexport.xml_err.xml  
grloader.nxroot=C:/GRLoader  
grloader.allowupdate=yes  
grloader.allowinsert=yes  
grloader.overwriteerrorxml=yes
```

注: 前の例で、*grloader.inputfile* は、CA CMDB エクスポート レポートが XML にエクスポートするのと同じディレクトリに配置します。レポート XML の名前は、スケジュールする CA CMDB エクスポート レポート XML と同じにする必要があります。

- e. BOXI\_GRLoader のスケジュールの左ペインで [Events] を選択し、[Event to wait for] として *Successful\_Report\_XML\_Event* が選択されていることを確認します。
- f. 左ペインから [Program Parameters] を選択し、引数、作業ディレクトリ、実行するクラス、クラスパス プログラムの各パラメータに対して設定されているデフォルト設定値が関連していることを確認します。

4. [Schedule] をクリックします。

プログラム オブジェクトがスケジュールされます。

## CA CMDB レポートのスケジュール

イベントを作成した後で CA CMDB エクスポート レポートをスケジュールし、XML スケジュールイベントを待つように BOXI\_GRLoader プログラム オブジェクトを構成およびスケジュールします。電子メールの添付ファイルとして GRLoader の出力の [通知を受け取るように、必要に応じてユーザを設定](#) (P. 70) できます。

注: BOXI\_GRLoader と CA CMDB エクスポート レポートの両方をスケジュールするときは、イベントトリガーの待機状態になるように、CA CMDB エクスポート レポートより前に BOXI\_GRLoader BOXI\_GRLoader プログラム オブジェクトをスケジュールします。

### レポートをスケジュールする方法

1. CMC または InfoView にログインし、以下のディレクトリを参照します。  
InfoView  
  ¥Public Folders¥CA Reports¥CCA to CMDB  
CMC  
  ¥Folders¥All Folders¥CA Reports¥CCA to CMDB
2. CA CMDB エクスポート レポートを右クリックし、[Schedule] を選択します。  
[Schedule] ページが表示されます。
3. 以下の手順に従います。
  - a. インスタンスのタイトルを入力します。
  - b. 左ペインから [Recurrence] を選択し、[Now]、[Hourly]、[Daily] など、適切なオプションを設定します。
  - c. 左ペインから [Parameters] を選択し、必要に応じて値を設定して、[Set Parameters] をクリックします。
  - d. 左ペインで [Events] を選択し、[Event to trigger on completion] としてデフォルトで [Successful\_Report\_XML\_Event] が選択されていることを確認します。
  - e. 左ペインから [Format] を選択し、デスティネーション形式を [Plain Text] に設定して、[Use the export options defined in the report] オプションが選択されていることを確認します。

- f. 左ペインから [Destination] を選択し、以下の手順で、生成された XML ファイルを格納する場所を設定します。
- [Destination] ドロップダウンリストから [File System] を選択します。
  - 明示的に生成するファイル名として「\*.xml」と入力します。これは、**BOXI\_GRLoader** をスケジュールするときに conf.txt で構成したものと同じファイルです。
  - conf.txt を構成するときに使用したディレクトリを入力します。たとえば、conf.txt に *grloader.inputfile=c:/GrLoader/XML/* という行が含まれる場合、XML ファイル cmdbexport.xml は c:/GRLoader/XML/ ディレクトリに格納されます。

4. [Schedule] をクリックします。

**BOXI\_GRLoader** はイベントの発生を待機し、レポートが正常にスケジュールされるとイベントがトリガされます。このアクションにより、**BOXI\_GRLoader.jar** プログラム オブジェクトのスケジュールが開始し、データが CA CMDB データベースにロードされます。

### GRLoader の電子メール添付ファイルの例

CA CMDB エクスポート レポートが完了した後の電子メールの添付ファイルとして **GRLoader** の出力の [通知を受け取るように、必要に応じてユーザを構成](#) (P. 70) できます。

**GRLoader** の出力例を次に示します。

```
18:26:24.937 CI and Relationship Loader for CA Service Desk Manager R12.7.000
/ - - ¥ ¥ | / / - - ¥ |The element type "Name" must be terminated by the matching
end-tag "</Name>".
Error occurred at line(152) column( 6) Error(The element type "Name" must be terminated
by the matching end-tag "</Name>".)
```

結果：

	Read	Skipped	Inserts	Updates	Errors	Warnings
CI	8	0	5	2	1	
Relation	0	0	0	0	0	0

```
GRLoader completed with errors.
See GRLoader.log for details.
18:26:28.000 GRLoader ended
```

## BOXI\_GRLoader と CA CMDB エクスポート レポートに個別のインスタンスを構成する方法

異なる時間間隔で CA CMDB エクスポート レポートをスケジュールする異なるフィルタ オプションが設定された任意の数のインスタンスを作成できます。インスタンスを作成するには、前に説明した BOXI\_GRLoader および CA CMDB エクスポート レポートのスケジュール手順を繰り返します。

BOXI\_GRLoader と、レポートによって生成されるインスタンス XML ファイルが適切に同期されるようにするには、以下の予防手順を検討します。

1. 生成する BOXI\_GRLoader および CA CMDB エクスポート レポートの各インスタンスに、異なるインスタンス名を設定したことを確認します。
2. CA CMDB エクスポートの各インスタンスに対して [異なるイベント](#) (P. 30) を使用したことを確認します。
3. BOXI\_GRLoader (ステップ 3e) の [Event to wait for] と CA CMDB エクスポート レポート (ステップ 3d) の [Event to trigger on completion] に、同じイベント名を使用します。

**重要:** 複数のインスタンスを作成する場合は、デフォルトのイベント名を使用しないでください。
4. 異なる構成ファイル (ステップ 3d を参照) が引数を BOXI\_GRLoader に渡し、BOXI\_GRLoader は他の実行インスタンスとは異なる grloader.inputfile を参照します。
5. CA CMDB エクスポート レポートのファイル名および場所 ディネーション値が BOXI\_GRLoader で使用されているパラメータと一致することを確認します。

## スケジュール イベントの作成

GRLoader をスケジュールした後にスケジュールイベントを作成します。このイベントにより、GRLoader はスケジュールされたレポートの正常終了時に生成される XML ファイルを取得して、データを CA CMDB にエクスポートできます。

### スケジュール イベントを作成する方法

1. CMC で [Define] 列の [Events] をクリックします。  
[Events] リストが表示されます。

2. [Manage] 、 [New Event] の順にクリックします。  
[New Event] ページが表示されます。
3. 以下のアクションを実行してください。
  - a. [Type] ドロップダウンリストから [Schedule] を選択します。
  - b. [Event Name] に「**XML Schedule**」と入力します。
  - c. [Success] チェック ボックスをオンにします。
4. イベントを保存して閉じます。



# 第3章：カスタマイズ

---

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[属性変換処理 \(P. 33\)](#)

[日本語プラットフォーム用の BOXI\\_GRLoader 引数 \(P. 35\)](#)

[属性変換のカスタマイズ \(P. 35\)](#)

[CA Configuration Automation と CMDB を統合するためのデータベース CI \(P. 43\)](#)

[属性マッピングと関係のカスタマイズ \(P. 45\)](#)

[delete flag を包含または除外するレポート XML のカスタマイズ \(P. 48\)](#)

## 属性変換処理

属性の変換はレポート レベルで処理されます。コンポーネントの属性変換をカスタマイズする場合は、Crystal Designer を使用してレポートを編集します。

CA CMDB エクスポート レポートは、次のコンポーネントの属性変換を処理します。

CA CMDB エクスポートの変数	CA Configuration Automation CI	コンポーネント名	CA CMDB の属性	形式
attributeTransform component	J2EE エンタープライズ アプリケーション	J2EE エンタープライズ アプリケーション	システム名	j2ee \$(host) \$(Application Name) \$(root)
attributeTransform component	Java Web アプリケーション	Java Web アプリケーション	システム名	j2ee \$(host) \$(Application Name) \$(root)
attributeTransform component	BEA WebLogic ドメイン (Windows)	BEA WebLogic ドメイン (Windows)	システム名	port \$(host) \$(ListenPort)
attributeTransform component	BEA WebLogic ドメイン (UNIX)	BEA WebLogic ドメイン (UNIX)	システム名	port \$(host) \$(ListenPort)
attributeTransform component	BEA WebLogic ドメイン (Windows)	BEA WebLogic ドメイン (Windows)	システム名	port \$(host) \$(ListenPort)

## 属性変換処理

---

CA CMDB エクス ポートの変数	CA Configuration Automation CI	コンポーネント名	CA CMDB の属性	形式
attributeTransform	component	BEA WebLogic ドメ イン (UNIX)	システム名	port \$(host) \$(ListenPo rt)
attributeTransform	component	IBM WebSphere 6 サーバインスタン ス (UNIX)	システム名	port \$(host) \$(ListenPo rt)
attributeTransform	component	IBM WebSphere 6 サーバインスタン ス (Windows)	システム名	port \$(host) \$(ListenPo rt)
attributeTransform	component	IBM WebSphere 5 サーバインスタン ス (UNIX)	システム名	port \$(host) \$(ListenPo rt)
attributeTransform	component	IBM WebSphere 5 サーバインスタン ス (Windows)	システム名	port \$(host) \$(ListenPo rt)

## 日本語プラットフォーム用の BOXI\_GRLoader 引数

日本語プラットフォーム用の BOXI\_GRLoader プログラム パラメータの構文を以下に示します。

```
-s http://<ServiceDeskhostname>:<ServiceDeskPortNumber> -u <servicedeskuser> -p
<servicedeskpassword> -i <CMDBExport.xml の絶対パス> -tf <日本語翻訳ファイルの場所> -n -a
-N <GRLoader クラスパス> -ad model=default -ad manufacturer=default
```

### 例

```
-s http://TestSDM:8080 -u servicedesk -p Password -i
C:\GRLoader\xml\cmdbexport.xml -tf
C:\GRLoader\GRLoader\xlate_en_to_ja.rul -n -a -N C:\GRLoader -ad
model=sample -ad manufacturer=sample
```

注: CA SDM では、BOXI\_GRLoader、プログラム パラメータ、引数リストでモデルおよび製造元タグが必要です。CI でタグを 1 つだけ指定した場合、エクスポートは失敗し、CMDB エクスポート XML ファイルには次のいずれかのエラーが記録されます。

- <!--ERROR: model is required when manufacturer is specified-->
- <!--ERROR: manufacturer is required when model is specified-->

## 属性変換のカスタマイズ

Crystal Reports Designer を使用すると、*CompCI* および *parentcomp.rpt* サブレポートの式を変更することによって、コンポーネント CI の *system\_name* の属性変換をカスタマイズできます。

<ftps>

1. CA CMDB エクスポート レポートを展開したエンタープライズの Crystal Report にログオンします。
2. CA Reports\CCA TO CMDB\ フォルダで、[CA CMDB Export] を右クリックし、[Open Report] を選択します。  
レポートが表示されます。
3. [CompCI] サブレポートを右クリックし、[Edit Subreport] を選択します。
4. Field Explorer から、*fA\_sysname* 式を開きます。

5. 適切な形式に式を編集します。

以下では、fA\_sysname の式の定義を示します。

```
local stringVar sysName;
local stringVar bpName;
local stringVar srvrName;
local stringVar compVer;
local stringVar compQual;
local stringVar appName;
local stringVar instDir;
local stringVar portNo;
local numberVar type; // typ will be 1, 2 or 3 depending upon bp name

local stringVar temp;
local stringVar tempQual;
local numberVar diff;

if (isnull(maximum({query_compci.Bp Name}, {query_compci.Comp Uuid})))
then bpName := "" else bpName := maximum({query_compci.Bp Name},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Srvr Name}, {query_compci.Comp Uuid})))
then srvrName := "" else srvrName := maximum({query_compci.Srvr Name},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Comp Qual}, {query_compci.Comp Uuid})))
then compQual := "" else compQual := maximum({query_compci.Comp Qual},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Comp Ver}, {query_compci.Comp Uuid})))
then compVer := "" else compVer := maximum({query_compci.Comp Ver},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Application Name}, {query_compci.Comp Uuid})))
then appName := "" else appName := maximum({query_compci.Application Name},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Install Dir}, {query_compci.Comp Uuid})))
then instDir := "" else instDir := maximum({query_compci.Install Dir},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Listen Port}, {query_compci.Comp Uuid})))
then portNo := "" else portNo := maximum({query_compci.Listen Port},
{query_compci.Comp Uuid});
```

```

if (bpName in ["J2EE Enterprise Application", "Java Web Application"]) then
    type := 1
else if (bpName in ["BEA WebLogic Domains (Windows)", "BEA WebLogic Domains
(UNIX)", "BEA WebLogic Domain (Windows)", "BEA WebLogic Domain (UNIX)"]) then
    type := 2
else if (bpName in ["IBM WebSphere 6 Server Instance (UNIX)", "IBM WebSphere 6
Server Instance (Windows)", "IBM WebSphere 5 Server Instance (UNIX)", "IBM
WebSphere 5 Server Instance (Windows)"]) then
    type := 2
else
    type := 3;
if(type=3) then
(
    if(not(isnumeric(left(srvrName,(instr(srvrName,'.')-1)))) then
        srvrName := left(srvrName,(instr(srvrName,'.')-1))
    else
        srvrName := srvrName;
)
else
    srvrName := srvrName;

if (type = 1) then
(
    sysName := "j2ee|" & srvrName & "|" & appName & "|" & instDir ;
    if (len(sysName) > 255) then
        sysName := left(sysName, 255);
)
else if (type = 2) then
(
    sysName := "port|" & srvrName & "|" & portNo;
    if (len(sysName) > 255) then
        sysName := left(sysName, 255);
)
else (
    temp := srvrName & "|" & bpName & "|" & compVer & "|";
    if (len(temp) + len(compQual) <= 255) then
        (sysName := temp & compQual)
    else
        (
            diff:= (length(temp) + length(compQual))+ 3 -252;
            if ( length(compQual) > diff ) then
                compQual:= mid(compQual,1,(length(compQual) -
diff)\2+1)+"..."+ mid(compQual,(length(compQual) + diff)\2);
            else
                compQual := "";
            sysName := temp & compQual;
        )
);

```

sysName;

6. `fA_sysname` 式を変更した後、CompCI サブレポートを開じます。
7. `parentcomp.rpt` サブレポートを開き、`fA_sysname` および `fA_sysname 2` 式の `system_name` 属性を適切に変更します。

以下では、`fA_sysname` の式の定義を示します。

```
local stringVar sysName;
local stringVar bpName;
local stringVar srvrName;
local stringVar compVer;
local stringVar compQual;
local stringVar appName;
local stringVar instDir;
local stringVar portNo;
local numberVar type; // typ will be 1, 2 or 3 depending upon bp name

local stringVar temp;
local stringVar tempQual;
local numberVar diff;

if (isnull(maximum({query_compci.Bp Name}, {query_compci.Comp Uuid})))
then bpName := "" else bpName := maximum({query_compci.Bp Name},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Srvr Name}, {query_compci.Comp Uuid})))
then srvrName := "" else srvrName := maximum({query_compci.Srvr Name},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Comp Qual}, {query_compci.Comp Uuid})))
then compQual := "" else compQual := maximum({query_compci.Comp Qual},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Comp Ver}, {query_compci.Comp Uuid})))
then compVer := "" else compVer := maximum({query_compci.Comp Ver},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Application Name}, {query_compci.Comp Uuid})))
then appName := "" else appName := maximum({query_compci.Application Name},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Install Dir}, {query_compci.Comp Uuid})))
then instDir := "" else instDir := maximum({query_compci.Install Dir},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_compci.Listen Port}, {query_compci.Comp Uuid})))
then portNo := "" else portNo := maximum({query_compci.Listen Port},
{query_compci.Comp Uuid});
```

```

if (bpName in ["J2EE Enterprise Application", "Java Web Application"]) then
    type := 1
else if (bpName in ["BEA WebLogic Domains (Windows)", "BEA WebLogic Domains
(UNIX)", "BEA WebLogic Domain (Windows)", "BEA WebLogic Domain (UNIX)"]) then
    type := 2
else if (bpName in ["IBM WebSphere 6 Server Instance (UNIX)", "IBM WebSphere 6
Server Instance (Windows)", "IBM WebSphere 5 Server Instance (UNIX)", "IBM
WebSphere 5 Server Instance (Windows)"]) then
    type := 2
else
    type := 3;
if(type=3) then
(
    if(not(isnumeric(left(srvrName,(instr(srvrName,'.')-1)))) then
        srvrName := left(srvrName,(instr(srvrName,'.')-1))
    else
        srvrName := srvrName;
)
else
    srvrName := srvrName;

if (type = 1) then
(
    sysName := "j2ee|" & srvrName & "|" & appName & "|" & instDir ;
    if (len(sysName) > 255) then
        sysName := left(sysName, 255);
)
else if (type = 2) then
(
    sysName := "port|" & srvrName & "|" & portNo;
    if (len(sysName) > 255) then
        sysName := left(sysName, 255);
)
else (
    temp := srvrName & "|" & bpName & "|" & compVer & "|";
    if (len(temp) + len(compQual) <= 255) then
        (sysName := temp & compQual)
    else
        (
            diff:= (length(temp) + length(compQual))+ 3 -252;
            if ( length(compQual) > diff ) then
                compQual:= mid(compQual,1,(length(compQual) -
diff)\2+1)+"..."+ mid(compQual,(length(compQual) + diff)\2);
            else
                compQual := "";
            sysName := temp & compQual;
        )
);

```

sysName;

以下では、fA\_sysname 2 の式の定義を示します。

```

local stringVar sysName;
local stringVar bpName;
local stringVar srvrName;
local stringVar compVer;
local stringVar compQual;
local stringVar appName;
local stringVar instDir;
local stringVar portNo;
local numberVar type; // typ will be 1, 2 or 3 depending upon bp name

local stringVar temp;
local stringVar tempQual;
local numberVar diff;

if (isnull(maximum({query_parentCompDetails.Bp Name}, {query_compci.Comp
Uuid})))
then bpName := "" else bpName := maximum({query_parentCompDetails.Bp Name},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_parentCompDetails.Srvr Name}, {query_compci.Comp
Uuid})))
then srvrName := "" else srvrName := maximum({query_parentCompDetails.Srvr Name},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_parentCompDetails.Comp Qual}, {query_compci.Comp
Uuid})))
then compQual := "" else compQual := maximum({query_parentCompDetails.Comp Qual},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_parentCompDetails.Comp Ver}, {query_compci.Comp
Uuid})))
then compVer := "" else compVer := maximum({query_parentCompDetails.Comp Ver},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_parentCompDetails.Application Name},
{query_compci.Comp Uuid})))
then appName := "" else appName := maximum({query_parentCompDetails.Application
Name}, {query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_parentCompDetails.Install Dir}, {query_compci.Comp
Uuid})))
then instDir := "" else instDir := maximum({query_parentCompDetails.Install Dir},
{query_compci.Comp Uuid});
if (isnull(maximum({query_parentCompDetails.Listen Port}, {query_compci.Comp
Uuid})))
then portNo := "" else portNo := maximum({query_parentCompDetails.Listen Port},
{query_compci.Comp Uuid});

if (bpName in ["J2EE Enterprise Application", "Java Web Application"]) then
  type := 1
else if (bpName in ["BEA WebLogic Domains (Windows)", "BEA WebLogic Domains
(UNIX)", "BEA WebLogic Domain (Windows)", "BEA WebLogic Domain (UNIX")]) then
  type := 2

```

```
else if (bpName in ["IBM WebSphere 6 Server Instance (UNIX)", "IBM WebSphere 6  
Server Instance (Windows)", "IBM WebSphere 5 Server Instance (UNIX)", "IBM  
WebSphere 5 Server Instance (Windows)"]) then  
    type := 2  
else  
    type := 3;  
if(type=3) then  
(  
    if(not(isnumeric(left(srvrName,(instr(srvrName,'.')-1)))) then  
        srvrName := left(srvrName,(instr(srvrName,'.')-1))  
    else  
        srvrName := srvrName;  
)  
else  
    srvrName := srvrName;  
if (type = 1) then  
(  
    sysName := "j2ee|" & srvrName & "|" & appName & "|" & instDir ;  
    if (len(sysName) > 256) then  
        sysName := left(sysName, 256);  
)  
else if (type = 2) then  
(  
    sysName := "port|" & srvrName & "|" & portNo;  
    if (len(sysName) > 256) then  
        sysName := left(sysName, 256);  
)  
else (  
    temp := srvrName & "|" & bpName & "|" & compVer & "|";  
  
    if (len(temp) + len(compQual) <= 256) then  
        (sysName := temp & compQual)  
    else  
        (  
            diff:= (length(temp) + length(compQual))+ 3 -252;  
            if ( length(compQual) > diff ) then  
                compQual:= mid(compQual,1,(length(compQual) -  
diff)\#2+1)+"..."+ mid(compQual,(length(compQual) + diff)\#2)  
            else  
                compQual := "";  
            sysName := temp & compQual;  
        )  
    );  
    sysName;
```

8. parentcomp.rpt サブレポートを閉じます。

変換属性がカスタマイズされます。

## CA Configuration Automation と CMDB を統合するためのデータベース CI

CA Configuration Automation と CMDB を統合するとき、「データベース名」という名前の新しい CI が cmdbexport.xml ファイルおよび CA SDM に作成されます。データベース名 CI は、[コンポーネントパラメータおよび変数]、および [ファイル構造] クラスパラメータ用に取得したデータベース名の値をエクスポートします。

カスタムブループリントを作成する場合は、[コンポーネントパラメータ] または [ファイル構造] クラスパラメータを [値詳細] 属性パネルで [解釈方法 "データベース名"] に設定します。[解釈方法 "データベース名"] は必要に応じて特定のパラメータに設定します。[リレーショナルデータベース] カテゴリに属するブループリントパラメータでは、[データベース名] に設定することを推奨します。

たとえば、Oracle Database 11g (Windows) コンポーネントブループリントに [データベース名] を設定するには、以下の手順に従います。

1. Oracle Database 11g (Windows) のコンポーネントブループリントのコピーを作成します。
2. [コンポーネント] または [ファイル構造] クラスパラメータ (この例では OracleSID) を選択し、[解釈方法 = データベース名] に設定します。
3. acmbo\_classmapping テーブルに以下のクエリを追加します。

```
INSERT INTO acmbo_classmapping VALUES('component','Copy of Oracle Database 11g (Windows)','Software.Database','Oracle')
```

4. Oracle 11 g がインストールされている任意の Windows コンピュータ用の Oracle Database 11g (Windows) コンポーネントブループリントのコピーのディスカバリを実行します。

ディスカバリの完了後、各サーバの [構成関係] ビューに関係が表示されます。

5. CMDB Export Report を実行して cmdbexport.xml ファイル内のデータベース名を確認します。以下にコードサンプルを示します。

```
<ci>
<name>orcl</name>
<dns_name />
<serial_number />
```

```
<system_name>orcl</system_name>
<family>Software.Database</family>
<class>Oracle</class>
<mdr_name>lodivmlcvs2026.ca.com</mdr_name>
<mdr_class>CCA r12.8</mdr_class>
<federated_asset_id>&objtype=database&name=orcl</federated_asset_id>
</ci>
<relation>
<type>communicates with</type>
<provider>
<name>Copy of Oracle Database 11g (Windows) 11.2.0.1.0
(C:\app\Administrator\product\11.2.0\dbhome_1)</name>
<system_name>
bgunn03-i44401.ca.com|Copy of Oracle Database 11g
(Windows)|11.2.0.1.0|C:\oracle\product\11.2.0\dbhome_1)
</system_name>
</provider>
<dependent>
<name>orcl</name>
<dns_name></dns_name>
<serial_number></serial_number>
<system_name>orcl</system_name>
</dependent>
</relation>
```

name および system\_name (この例では太字で示される) は検出された値です。 family および class はプロバイダ コンポーネントに基づいて生成されます。

エクスポートの後、CA Service Desk UI は関係を、CMDB Visualizer はコンポーネント関係を表示します。

## 属性マッピングと関係のカスタマイズ

CA CMDB エクスポート レポートを使用して CA Configuration Automation と CA CMDB を統合すると、製品間で CI データがマップされます。

**重要:** レポートスクリプトでテーブルを更新する前に、テーブルをバックアップしてください。テーブルをバックアップするには、元の形式にリストアする必要のあるテーブルをドロップし、特定のパッチから、必要なテーブルに対応する SQL スクリプトを実行します。このアクションにより、テーブルが再び設定されます。スクリプトを実行するには、CA Configuration Automation r12.8 データベース ユーザは SQL Server または Oracle のデータベース オブジェクトを追加および更新するためのアクセス権を持っている必要があります。

以下のテーブルは、この統合での CI のマップ方法に対応しています。

- [acmbo\\_attrmapping \(P. 46\)](#)
- [acmbo\\_classmapping \(P. 47\)](#)
- [acmbo\\_relshtpmapping \(P. 47\)](#)

テーブルをバックアップするには、sqlcmd コマンドを使用します。次に使用例を示します。

```
sqlcmd -s servername -d mdb -q "SELECT * INTO acmbo_attrmappingorig FROM acmbo_attrmapping  
sqlcmd -s servername -d mdb -q "SELECT * INTO acmbo_classmappingorig FROM acmbo_classmapping  
sqlcmd -s servername -d mdb -q "SELECT * INTO acmbo_relshtpmappingorig FROM acmbo_relshtpmapping
```

元のバックアップをリストアするには、以下のコマンドを実行します。

```
sqlcmd -s servername -d mdb -q "SELECT * INTO acmbo_attrmapping FROM acmbo_attrmappingorig  
sqlcmd -s servername -d mdb -q "SELECT * INTO acmbo_classmapping FROM acmbo_classmappingorig  
sqlcmd -s servername -d mdb -q "SELECT * INTO acmbo_relshtpmapping FROM acmbo_relshtpmappingorig
```

## acmbo\_attrmapping テーブル

*acmbo\_attrmapping* テーブルでは、CA Configuration Automation と CA CMDB の属性のさまざまな CI および対応するマッピング情報が指定されています。次にクエリ結果の例を示します。

```
select * from acmbo_attrmapping;
```

CI	CA Configuration Automation の属性	CA CMDB の属性
server	ip_address	alarm_id
server	domainname	dns_name
server	host_id	federated_asset_id
server	mac_address	mac_address
server	make	manufacturer
server	model	model
server	serialno	serial_number
server	system_name	system_name

たとえば、CA Configuration Automation のサーバ CI の *ip\_address* 属性は、CA CMDB の *alarm\_id* 属性を参照します。

CA Configuration Automation の *ip\_address* 属性を CA CMDB の IPAddress にカスタマイズする場合は、次の例で示すように、*acmbo\_attrmapping* テーブルを更新します。

```
update acmbo_attrmapping set cmdbattribut='IPAddress' where ci='server' and acmattribute='ip_address'
```

## acmbo\_classmapping テーブル

*acmbo\_classmapping* テーブルでは、CA Configuration Automation と CA CMDB のさまざまな CI および対応するクラス、さまざまな CI のファミリ情報が指定されています。次にクエリ結果の例を示します。

```
select * from acmbo_classmapping;
```

CI	コンポーネント名	CA CMDB のファミリ	CA CMDB のクラス
component	AIX	ソフトウェア.オペレーティングシステム	AIX OS
component	BSD Unix	ソフトウェア.オペレーティングシステム	Unix OS
component	HP-UX	ソフトウェア.オペレーティングシステム	HP UX OS
component	Red Hat Linux	ソフトウェア.オペレーティングシステム	Linux OS
component	Solaris	ソフトウェア.オペレーティングシステム	Sun OS

たとえば、CA CMDB のクラスまたはファミリ属性をカスタマイズする場合は、次の例に示すように、*acmbo\_classmapping* テーブルを更新します。

```
update acmbo_classmapping set cmdbcclass='AIX' where ci='component' and
cmdbcclass='AIX OS' and componentname='AIX' and cmdbfamily='Software.Operating
System'
```

## acmbo\_relsmapping テーブル

*acmbo\_relsmapping* テーブルでは、CA Configuration Automation と CA CMDB のさまざまな CI および対応する関係情報が指定されています。次にクエリ結果の例を示します。

```
select * from acmbo_relsmapping;
```

Source CI	ターゲット CI	関係
server	server	communicates with (通信する)

Source CI	ターゲット CI	関係
server	Hard Drive	contains
server	virtual	is the parent of (親となる)
server	component	hosts
server	サービス	runs (実行する)
server	lpar	is the parent of (親となる)
server	nic	contains
server	File System	contains

たとえば、CA CMDB の関係属性をカスタマイズする場合は、次の例に示すように、*acmbo\_relshpmapping* テーブルを更新します。

```
update acmbo_relshpmapping set relationship='hosts' where ci='server' and targetci='component' and relationship='communicates with'
```

## [delete\\_flag を包含または除外するレポート XML のカスタマイズ](#)

CA Configuration Automation から更新を実行するたびにデータで置換される CI が更新されないようにするには、入力 XML に `<delete_flag>` が設定されないようにします。

`<delete_flag>` を除外するか含めるには、CA Configuration Automation データベースで適切なスクリプトを実行します。

- `delete_flag` をレポート XML から除外するには：

```
update acmbo_attrmapping set ci = 'component_inactivate' where acmattribute = 'delete_flag'
```

- `delete_flag` をレポート XML に含めるには：

```
update acmbo_attrmapping set ci = 'component' where acmattribute = 'delete_flag'
```

# 第4章：既知の問題

---

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

- [CA Business Intelligence が、非デフォルト ポートを使用する SQL Server の名前付きインスタンスに接続できない \(P. 49\)](#)
- [CA SDM への CMDB レポート エクスポートが失敗する \(P. 50\)](#)
- [SQL Execute を実行できない \(P. 50\)](#)
- [接続を開くことができない \(P. 52\)](#)
- [動作に十分なメモリがない \(P. 53\)](#)
- [電子メール通知が送信されない \(P. 55\)](#)
- [CAFApp.war の展開が失敗する \(P. 56\)](#)
- [Oracle データベースを使用する CA Configuration Automation のアップグレードでのエラー \(P. 56\)](#)
- [管理対象外サーバとの関係をエクスポートすると、GRLoader でエラーが発生する \(P. 57\)](#)
- [仮想マシンとプロバイダの関係を抽出すると XML ファイルでエラーが発生する \(P. 57\)](#)

## CA Business Intelligence が、非デフォルト ポートを使用する SQL Server の名前付きインスタンスに接続できない

### 問題の状況:

CA Configuration Automation サーバがデフォルト構成の SQL Server 名前付きインスタンスを使用している場合、データベースインスタンスに対してデフォルト以外のポート（1433 以外）を使用すると、CA Business Intelligence は接続できません。

### 解決方法:

CA Business Intelligence システムの SYSTEM DSN に新しい DSN 接続を作成して構成し、SQL Server の名前付きインスタンスと接続します。

注: SYSTEM DSN の名前はデータベース名と同じです。この名前は、cca などの CA Business Intelligence 接続パラメータで使用されていました。

## CA SDM への CMDB レポート エクスポートが失敗する

CA SDM では、モデルタグと製造元タグの両方が構成アイテムで使用されている必要があります。CI でタグが 1 つだけ使用されている場合、エクスポートは失敗し、CMDB エクスポート XML ファイルには次のいずれかのエラーが記録されます。

```
<!--ERROR: model is required when manufacturer is specified-->
<!--ERROR: manufacturer is required when model is specified-->
```

これらのエラーを回避するには、`BOXI_GRLoader`、プログラム パラメータ、引数リストに製造元およびモデル パラメータを追加します。

### 引数リストの構文

```
-s http://<ServiceDeskhostname>:<ServiceDeskPortNumber> -u <servicedeskuser> -p
<servicedeskpassword> -i <Absolute Path of CMDBExport.xml> -n -a -N <GRloader
Classpath> -E -ad model=default -ad manufacturer=default
```

## SQL Execute を実行できない

### 問題の状況:

特定のユニバースに基づいて DeskI レポートを実行しているときに、以下のエラーメッセージを受け取ります。

Error during SQL execution: (DA0003)

エラーの詳細は以下のとおりです。

Exception: CS, Unable to run the sql execute

注: InfoView ではレポートはエラーなしで実行します。

同じユニバースに存在するテーブルのテーブル値を検索すると、次のエラーメッセージが表示されます。

Exception: CS, Unable to run the sql execute

### 解決方法:

ユニバースに対する接続が壊れています。この問題を修正するには、次のように、接続を作成し、ユニバースに対してそれを使用します。

1. BusinessObjects Universe Designer にログオンします。
2. メニューから [File] - [Import] を選択します。  
[Import Universe] ダイアログボックスが表示されます。
3. 目的のユニバースを参照し選択します。 [OK] をクリックします。  
ユニバースがインポートされます。
4. [File] - [Parameters] を選択します。  
[Universe Parameters] ダイアログボックスが表示されます。
5. [Definition] タブで [New] をクリックします。  
New Connection ウィザードが表示されます。
6. [次へ] をクリックします。  
[Define a new connection] ダイアログボックスが表示されます。
7. 新しい接続名を入力し、レポートに SQL Server と Oracle のどちらのデータベースを使用するかに基づいて、データベース ミドルウェアを選択します。 [Next] をクリックします。  
[Define a new connection] ダイアログボックスが表示されます。
8. ユーザ名、パスワード、データベース名、およびデータベースサーバ名を入力します。接続をテストし、ユニバースが応答しているかどうかを判定します。 [Next] をクリックし、 [OK] をクリックします。  
[Universe Designer] ウィンドウが表示されます。
9. ユニバースを保存し、Universe Designer のメニューから [File] - [Export] を選択します。  
ユニバースに対する接続が作成されます。

## 接続を開くことができない

問題の状況:

InfoView でレポートを実行すると、以下のメッセージの 1 つ以上が表示されます。

Failed to open Connection

Incorrect logon parameters

Incomplete database logon information

解決方法:

レポートデータベースのログオン情報が完全ではないか、または CAFPage が正しく構成されていません。これらの問題を解決するには、以下の手順に従います。

1. ユニバースが使用しているデータベースを確認します。
2. ユニバースの接続をテストし、ユニバースが正しく応答していることを確認します。
3. (Oracle データベースのみ) CA Business Intelligence システムに Oracle クライアントが正しくインストールされていること、および TNS エントリがユニバースで指定されているものと一致することを確認します。

TNS エントリの例を以下に示します。

```
orcl =  
  (DESCRIPTION =  
    (ADDRESS_LIST =  
      (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = abcd-tm-114)(PORT = 1521))  
    )  
    (CONNECT_DATA =  
      (SERVICE_NAME = orcl)
```

4. (SQL Server データベースのみ) oledb.sbo ファイルが正しく構成されていることを確認します。OLE DB ネットワーク層を使用して、BIAR ファイルを Business Objects エンタープライズにインポートします。
5. setReportType.jsp が BusinessObject 認証情報で正しく編集されていることを確認します。database.properties ファイルが、レポートに使用する CA Configuration Automation r12.8 データベースを使用していることを確認します。database.properties ファイルを変更した後、BusinessObjects システムの Tomcat サーバまたは Web アプリケーション サーバを再起動します。
6. CAFPage が動いていない場合は、BusinessObjects の Web アプリケーション サーバのログ フォルダ内のログ ファイルを参照します。次はその例です。

C:\Program Files\Business Objects\Tomcat55\logs\CAFApp.log

7. ログを確認します。ログに以下のエラー メッセージが含まれる場合、Oracle の JDBC \*.jar ファイルがシステムのクラスパスに見つかりません。

If the error is ClassNotFoundException: OracleJDBCDriver not found

Oracle JDBC ドライバのパスを、システムの CLASSPATH 変数に設定します。

## 動作に十分なメモリがない

### 問題の状況:

データベースに動作用の十分なメモリがない場合、以下のシステム問題が発生する可能性があります。

- スケジュールが保留状態でハングアップする。
- オンデマンドのビューがロードの間にハングアップする。

### 解決方法:

以下の 1 つ以上の問題を修正します。

- レポートを実行しているシステムが低メモリ構成になっています。
- システムのネットワークの応答が良好ではありません。
- (Oracle) TNS 名が認識されていません。TNSlistener がデータベース サーバ上で実行されていて、応答していることを確認します。

- スケジューリング プロセスを実行しているサーバで、一時フォルダまたはキャッシュがいっぱいになっています。
- WebiProcessing サーバがシャット ダウンされています。
- CA Business Intelligence が正しくインストールされていません。

メモリの問題を回避するには、以下の推奨設定または最小要件を使用します。

- データベースが大きい場合、レポート条件に少数のサーバだけを選択します。
- コンピュータのローカル ドライブの領域を確認します。これらのドライブの領域を増加させます。
- コンピュータの RAM サイズを増加させます。最低限 2 GB の RAM が必要です。
- 以下のように Java Tomcat のメモリを増加させます。
  1. [スタート] - [プログラム] - [Tomcat] - [Configuration] - [Java] タブの順に選択します。
  2. 初期サイズを **512** に設定し、最大サイズを **1024** に設定します。
  3. Tomcat を再起動し、レポートを更新して、正しい数のページがレポートにあることを確認します。
- サーバで、次のようにしてページ/ファイルサイズを確認し調節します。
  1. マイ コンピュータのプロパティの [詳細設定] タブで [パフォーマンス] の [設定] を選択します。  
[パフォーマンス オプション] ダイアログ ボックスが表示されます。
  2. [詳細設定] タブを選択し、[仮想メモリ] の [変更] ボタンをクリックします。
  3. C および D ドライブのページング ファイル サイズ（初期および最大）を調節します。

- 次のようにして、Windows 一時ディレクトリからファイルを削除します。
  1. [スタート] - [ファイル名を指定して実行] を選択します。
  2. 「%temp%」と入力し、[OK] をクリックします。

注: ローカルコンピュータに大きなレポートをエクスポートまたは保存している場合は、一時ディレクトリのサイズを確認してください。
- 以下のようにして、最大キャッシュ サイズを変更します。
  1. Crystal Report Cache Server のプロパティを開き、サーバを停止します。
  2. -deleteCache オプションをコマンドラインの最後に追加します。
  3. 最大キャッシュ サイズを 256000 から 768000 に変更します。
  4. サーバを起動します。
- 以下のキャッシュ フォルダの内容を削除または移動します。  
`<インストール ディレクトリ>\Program Files\Business Objects\BusinessObjects Enterprise 12.0\Data\`

注: さまざまな種類のメモリ エラーに関するトラブルシューティング ヒントの詳細については、[www.sdn.sap.com](http://www.sdn.sap.com) Web サイトを参照してください。

## 電子メール通知が送信されない

### 問題の状況:

電子メール通知がユーザに送信されず、以下のエラーメッセージが表示されます。

Address Error.[CrystalEnterprise.Smtp]: [] occurred

### 解決方法:

CA Business Intelligence で[電子メール サーバおよびファイルシステム サーバを構成](#) (P. 70) します。

注: InfoView または CMC から CA CMDB エクスポート レポートをスケジュールする場合、CA Business Intelligence においてオンデマンドでレポートを表示すると、レポートに多くのサブレポートが含まれるため、XML としてプレーンテキストにスケジュールすることをお勧めします。

## CAFApp.war の展開が失敗する

### 問題の状況:

CAFApp.war の展開が認証エラーで失敗します。

### 解決方法:

この問題は、`setReportType.jsp` ファイルで適切なビジネス オブジェクト認証情報が設定されていないことが原因です。Client Access Framework (CAF) ページの WAR ファイルを展開します。

## Oracle データベースを使用する CA Configuration Automation のアップグレードでのエラー

### 問題の状況:

Oracle データベースを使用する CA Configuration Automation のアップグレードの間に、次のエラーが表示されます。

エラー: 名前が “acmdata” であるテーブルスペースが見つかりません。存在するテーブルスペース名を使用してください。

### 解決方法:

CA Configuration Automation サーバがバックエンドに Oracle データベースを使用していて、使用されているデータ テーブルスペース名およびインデックス テーブルスペース名が「acmdata」および「acmindex」ではない場合、現在のアップグレード インストーラはデータおよびインデックスを正しく識別しません。

次のように、正しいデータ名およびインデックス名を指定してコマンド ラインからインストーラを実行してください。

```
installserver.exe -DDATATSNAMESPACE=acmcmdbdata -DINDEXTSNAME=acmcmdbindex
```

## 管理対象外サーバとの関係をエクスポートすると、GRLoader でエラーが発生する

### 問題の状況:

CA Business Intelligence インターフェースで **[Include servers not listed in Server Table]** オプションを有効にして関係をエクスポートすると、次のエラーが表示されます。

Provider CI not found

### 解決方法:

**[Include servers not listed in Server Table]** オプションを無効にして、CA Configuration Automation サーバテーブルに含まれないサーバとの関係のエクスポートを除外します。また、サーバを CA Configuration Automation サーバテーブルに追加することにより、サーバを検出できます。

## 仮想マシンとプロバイダの関係を抽出すると XML ファイルでエラーが発生する

### 問題の状況:

統合が仮想マシンとそのプロバイダ（VMware ESX ホストなど）の間の関係を抽出しようとすると、XML エラーファイル (<指定されたファイル名>\_err.XML) および GRLoader.log ファイルに、プロバイダ CI が見つからないというエラーが記録されます。

### 解決方法:

- CA Configuration Automation が VMware ESX ホストを検出したことを確認します。
- VMware ESX ホストと VMware vCenter サーバのどちらか一方または両方の認証情報を、CA Configuration Automation の認証情報ポールトに追加したことを確認します。認証情報を追加した後、Softagent（たとえば、Softagent を使用した ping スイープスキャン）を含むネットワークスキャンを使用して、ネットワークディスクバリを再度実行します。



# 付録 A: Appendix

---

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

- [ODBC システム DSN の作成 \(P. 60\)](#)
- [BICONFIG ユーティリティでの BIAR ファイルのインポート \(P. 62\)](#)
- [インポート ウィザードでの BIAR ファイルのインポート \(P. 66\)](#)
- [CA Business Intelligence での電子メール サーバおよびファイルシステム サーバの構成 \(P. 70\)](#)
- [CA Business Intelligence でのプログラム オブジェクトの構成 \(P. 72\)](#)
- [CA Business Intelligence で GRLoader 環境を構成する方法 \(P. 73\)](#)
- [BOXI\\_GRLoader.jar の構成 \(P. 75\)](#)
- [GRLoader プログラム オブジェクトのパラメータ \(P. 77\)](#)
- [スクリプト \(P. 78\)](#)

## ODBC システム DSN の作成

BIAR ファイルをインポートしてデータベースに接続する前に、CA Configuration Automation データベースに対する ODBC システム DSN を作成します。ODBC システム DSN は、CA Configuration Automation データベースへの接続性を提供します。

**注:** SQL Server データベースを使用している場合は、OLE DB 接続をお勧めします。

**重要:** Oracle データベースを使用している場合は、ODBC システム DSN を作成する必要はありません。CA Business Intelligence をインストールしたコンピュータに Oracle クライアント (TNS エントリ) をインストールし、*tnsnames.ora* ファイルにデータベース サーバのエントリを作成します。

**注:** ODBC ドライバを UNIX にインストールする方法については、SAP Developer Network Web サイトのホワイトペーパー「How to Install and Configure DataDirect 5.2 on UNIX」を参照してください。*odbc.ini* ファイルでデータベース認証情報を構成する方法が説明されています。

Windows で ODBC システム DSN を作成するには

1. [スタート] メニューから [管理ツール] - [データ ソース (ODBC)] に移動します。  
[ODBC データ ソース アドミニストレータ] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. [システム DSN] タブの [追加] をクリックします。  
[データ ソースの新規作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. リストから [SQL Server] を選択して、[完了] をクリックします。  
[SQL Server に接続するための新規データ ソースを作成する] ダイアログ ボックスが表示されます。

4. DSN 名に「**CCA\_CMDB**」と入力し、[サーバー] フィールドに使用するデータベースを入力して、[次へ] をクリックします。  
[SQL Server に接続するための新規データ ソースを作成する] ダイアログ ボックスが続けます。
5. [ユーザーが入力する SQL Server 用のログイン ID とパスワードを使う] オプションを選択し、データベース サーバのユーザ名とパスワードを入力して、[次へ] をクリックします。  
レポートがサーバを参照します。
6. データベース名 (ccartm など) を選択し、[次へ] をクリックします。
7. [完了] をクリックします。  
[ODBC Microsoft SQL Server セットアップ] ダイアログ ボックスが表示されます。
8. [データ ソースのテスト] をクリックします。  
接続テストが正常に完了したことを見せるメッセージが表示されます。  
ODBC の作成が正常に完了したことを確認するには、[ODBC データ ソース アドミニストレーター] ダイアログ ボックスに移動し、[システム DSN] タブで DSN 名 CCA\_CMDB を探します。

## BICONFIG ユーティリティでの BIAR ファイルのインポート

*CCA to CMDB Export Group*、CA CMDB エクスポート レポート、  
BOXI\_GRLoader.jar（GRLoader.jar に対するラッパー JAR）、「CA Business  
Intelligence ユニバースを CA Business Intelligence にインポートするには、  
BICONFIG ユーティリティを使用します。このユーティリティは、BIAR  
(xml\_biar\_import.biar) ファイルの BusinessObjects エンタープライズへの  
コマンドラインインポートなど、さまざまな CA Business Intelligence オブ  
ジェクト機能に対するソリューションを提供します。また、BIAR ファイ  
ルのデータベース接続情報を動的に変更します。

**注:** BICONFIG ユーティリティを使用するには、システム環境で  
JAVA\_HOME 変数を設定してください。設定しないと、ユーティリティで  
エラー メッセージが表示されます。

**重要:** BIAR ファイルをインポートするときに OLE DB を使用する場合は、  
接続エラーが発生しないように [oledb.sbo フィルを変更 \(P. 64\)](#) してください。

### BICONFIG ユーティリティで BIAR ファイルをインポートする方法

- ソリューションを開いているコンピュータに、BIConfig フォルダの  
内容をコピーします。
- サンプル フォルダにある xml\_biar\_import.xml ファイルで、必要なパラ  
メータ値を設定します。
- 次に示すネットワーク層と RDMS の組み合わせの例のように、パラ  
メータを変更します。
  - SQL Server を使用している場合：  

```
<networklayer>OLE DB</networklayer>
<rdms>MS SQL Server 2005</rdms>
```
  - Oracle を使用している場合：  

```
<networklayer>Oracle OCI</networklayer>
<rdms>Oracle 10</rdms>
```
- 注: これらのパラメータの設定の詳細については、SQL Server および  
Oracle のサンプル BIAR ファイルを参照してください。
- BIAR ファイルの場所、データベースのユーザ名とパスワード、データ  
ソース名、およびデータベース サーバ名を設定します。

5. コマンドラインからの以下のユーティリティを実行します。

```
biconfig -h "host" [-n "port"] -u "<user>" [-p "password"] [-s "security"] -f  
"XML-config-file-name" | -x "XML-config-string" [-i[f] "BIAR-file-path"]  
[--help]
```

host

BusinessObjects CMS ホストを指定します。

port

(オプション) BusinessObjects CMS ポートを指定します。

デフォルト : 6400

user

BusinessObjects CMS ユーザを指定します。

password

(オプション) BusinessObjects CMS パスワードを指定します。

デフォルト : (空の文字列)

security

(オプション) BusinessObjects のセキュリティを指定します。

デフォルト : secEnterprise

XML-config-file-name

XML 構成ファイルの名前または絶対パスを指定します。 ファイル名だけを指定した場合は、BIconfig フォルダで構成ファイルが検索されます。

BIAR-file-path

(オプション) BIAR ファイルの名前または絶対パスを指定します。 ファイル名だけを指定した場合は、BIconfig フォルダで構成ファイルが検索されます。

ユーティリティは、BIconfig フォルダに BIconfig.log ファイルを生成します。 このログでは、インポートのステータスが表示されます。

**注:** BIAR ファイルが正常にインポートされない場合、ログ ファイルはすべてのエラーメッセージを表示します。

6. BIAR ファイルをインポートした後、CA Business Intelligence でユーザを [CCA to CMDB Export Group] に追加し、BIAR ファイルのインポートでユーザが CA CMDB エクスポート レポート、CCA\_CMDB ユニバース、CCA\_CMDB 接続へのアクセスに対するフル コントロールを持つようになります。

注: ユーザを CA Business Intelligence のグループに追加する詳細については、CA Business Intelligence r3.2 または r3.3 SP1 の管理ガイドを参照してください。

## oledb.sbo ファイルの変更

BIAR ファイルをインポートするときに OLE DB を使用する場合、CA Business Intelligence ディレクトリの *oledb.sbo* ファイルを変更する必要があります。このファイルを変更すると、SQL Server で OLE DB を使用するときにエラーが発生しなくなります。

### ファイルを変更する方法

1. 以下のデフォルトインストールディレクトリにある *oledb.sbo* ファイルを開きます。  
`%BOXI_installation_directory%\BusinessObjects Enterprise  
12.0\win32_x86\dataAccess\connectionServer\`
2. `< DataBase Active="Yes" Name="MS SQL Server 2005" >` の行を探し、次のパラメータを編集します。

#### プロバイダ CLSID

値を **SQLOLEDB** に変更します。

#### Enumerator CLSID

値を **SQLOLEDB Enumerator** に変更します。

3. Server Intelligence Agent (SIA) を再起動します。

OLE DB の変更が有効になります。

## SQL Server の例

以下の例では、SQL Server の XML ファイルのサンプルを示します。

```
<?xml version="1.0"?>
<biconfig version="1.0">
  <!-- Import BIAR file -->
  <step priority="1">
    <add>
      <biar-file name="C:\biconfigmuthu\ccacmdb.biar">
        <networklayer>OLE DB</networklayer>
        <rdms>MS SQL Server 2005</rdms>
        <username>ccartm</username>
        <password>ccartm</password>
        <datasource>ccartm</datasource>
        <server>testpc</server>
      </biar-file>
    </add>
  </step>
</biconfig>
```

## Oracle の例

以下の例では、Oracle の XML ファイルのサンプルを示します。

```
<?xml version="1.0"?>
<biconfig version="1.0">
  <!-- Import BIAR file -->
  <step priority="1">
    <add>
      <biar-file name="C:\biconfig\CCA_CMDB_Report.biar">
        <networklayer>Oracle OCI</networklayer>
        <rdms>Oracle 10</rdms>
        <username>ccaserver</username>
        <password>ccaserver</password>
        <datasource>ORA</datasource>
        <server>testpc</server>
      </biar-file>
    </add>
  </step>
</biconfig>
```

## インポート ウィザードでの BIAR ファイルのインポート

インポート ウィザードを使用して Business Intelligence Archive Resource (BIAR) ファイルをインポートできますが、BICONFIG ユーティリティを使用することもできます。このファイルには、CA CMDB エクスポート レポートと、統合を完了するために必要な CA Business Intelligence ユニバースが含まれます。

**注:** インポート ウィザードを使用する場合は、Universe Designer にログインすることによりユニバース接続を手動で変更する必要があります。

### BIAR ファイルをインポートする方法

1. [スタート] - [プログラム ファイル] - [BusinessObjects XI Release 3.1] - [BusinessObjects Enterprise] - [Import Wizard] の順にクリックします。  
インポート ウィザードが表示されます。
2. [次へ] をクリックし、ソースとして Business Intelligence Archive Resource (BIAR) ファイルを選択し、BIAR ファイルを参照して選択します。  
ファイルの名前は、たとえば *CCA\_CMDB.biar* などです。
3. インポート先 Business Objects XI Central Management Server (CMS) のユーザ名とパスワードを入力して、[次へ] をクリックします。  
インポート ウィザードが BIAR ファイルをロードします。
4. [Clear all] をクリックし、次のタスクを実行します。
  - a. [Import folders and objects] 、 [Import application folders and objects] 、 [Import universes] の各オプションを選択して、[次へ] をクリックします。

- b. 以下のインポート シナリオを選択します。
  - オブジェクトの固有の識別子を使用して、インポート先システムにすでに存在するかどうかを判別します
  - インポート先オブジェクトを更新します。名前が競合する場合、名前を変更します
- c. [次へ] をクリックし、[Overwrite object rights] オプションを無効にして、再度 [次へ] をクリックします。
- d. [CCA TO CMDB Export Group] を選択し、[次へ] をクリックします。

注: [CCA to CMDB Export Group]だけが選択されていて、他のグループまたはユーザが選択されていないことを確認します。

選択したインポート オブジェクトに権限が関連付けられたことを示すメッセージが表示されます。

- e. [次へ] をクリックし、**BOXI\_GRLoader** および **CA CMDB** エクスポートが含まれる適切なレポート フォルダを参照します。次はその例です。

**CA Reports** → **CA CCA to CMDB**

- f. [次へ] をクリックします。  
[Select application folders and objects] ダイアログ ボックスが表示されます。

5. CA Business Intelligence サーバを選択し、[次へ] をクリックします。  
[Import options for universes and connections] ダイアログ ボックスが表示されます。
6. [Import the universes and connections that the selected Web Intelligence and Desktop Intelligence documents use directly] オプションを選択し、[次へ] をクリックします。
7. CA ユニバース、CCA\_CMDB、CCA\_CMDB で CA Business Intelligence ユニバースを選択します。  
[Import options for publications] ダイアログ ボックスが表示されます。

8. [Do not import recipients] オプションを選択し、[次へ] をクリックします。  
[A note on importing reports] ダイアログ ボックスが表示されます。
9. [次へ] をクリックします。  
[Ready to Import] ダイアログ ボックスが表示されます。
10. [完了] をクリックします。  
情報がインポート先環境にインポートされます。

## データベース接続の変更

データベース接続を変更するには Universe Designer を使用します。 BIAR ファイルをインポート ウィザードでインポートした場合は、Designer でデータベース接続を変更する必要があります。

### データベース接続を変更するには

1. [スタート]-[プログラム ファイル]-[Business Objects XI 3.1]-[Business Objects Enterprise] - [Designer] の順にクリックします。  
[User Identification] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. エンタープライズシステム名、ユーザ名 (Administrator など) 、パスワードを入力し、[OK] をクリックします。  
Universe Designer が表示されます。
3. [File] - [Import] をクリックします。  
[Import Universe] ダイアログ ボックスが表示されます。
4. /CA Universes/ 下の CCA\_CMDB ユニバースを選択し、[OK] をクリックします。  
ユニバースが正常にインポートされたことを示すメッセージが表示されます。

5. [File] - [Parameters] をクリックします。  
[Universe Parameters] ダイアログ ボックスが表示されます。
6. 以下のタスクを実行します。
  - a. [Edit] をクリックします。  
[Edit CCA\_CMDB connection] ダイアログ ボックスが表示されます。
  - b. [Back] をクリックします。  
[Database Middleware Selection] ダイアログ ボックスが表示されます。
  - c. CA Configuration Automation データベースの適切なタスクを実行します。
    - SQL Server の場合、Microsoft、MS SQL Server 2005 または 2008（使用している CA Configuration Automation データベースに対応）、OLE DB プロバイダを選択し、[Next] をクリックし、SQL Server を指すようにユニバース接続を変更して、[Next] をクリックします。
    - Oracle の場合、Oracle、Oracle クライアントを選択し、Oracle を指すようにユニバースを変更して、[Next] をクリックします。  
[Login Parameters] ダイアログ ボックスが表示されます。
  - d. ユーザ名（例：ccaserver）、パスワード、Oracle サーバのサービス（例：ora）を入力し、[接続のテスト] をクリックします。  
サーバが応答していることを示すメッセージが表示されます。
  - e. [Next] - [Finish] の順にクリックします。  
CCA\_CMDB の接続が変更されます。
7. [File] - [Save] をクリックします。  
ユニバースが保存されます。
8. [File] - [Export] をクリックします。  
[Export Universe] ダイアログ ボックスが表示されます。
9. [ドメイン] ドロップダウンリストから /CA Universes/CCA\_CMDB を選択し、[OK] をクリックします。  
ユニバースがエクスポートされます。

## CA Business Intelligence での電子メール サーバおよびファイルシステム サーバの構成

統合のインストールの間にデスティネーションサーバを構成しなかった場合、または特定のインスタンス用にデスティネーションサーバを構成する必要がある場合は、必要に応じて *CrystalReportJobServer*、*ProgramJobServer*、および *DestinationJobServer* のデスティネーションサーバを構成できます。ファイルシステムは、指定するユーザに電子メールシステムが送信するファイルを生成します。

以下の通知の宛先も選択できます。

### ファイル デスティネーション

特定のファイルの場所に出力を送信します。

### FTP

特定の FTP アドレスに出力を送信します。

### デフォルトのエンタープライズの場所

**BusinessObjects** エンタープライズでのデフォルトの場所を指定します。インスタンスタイトルをクリックし、任意のテキストエディタを使用して出力を開きます。

**注:** オブジェクトの履歴から任意のデスティネーションに送信された成功インスタンスの出力にアクセスします。インスタンスタイトルをクリックし、任意のテキストエディタを使用して出力を開きます。

### 電子メール サーバおよびファイル サーバを構成するには

1. [スタート] - [プログラム] - [BusinessObjects XI 3.1] - [BusinessObjects Enterprise Central Management Console] をクリックします。  
BusinessObjects Central Management Console (CMC) ログインページが表示されます。
2. ユーザ名とパスワードを入力して、[Log In] をクリックします。  
Central Management Console が表示されます。
3. [Organize] 列から [サーバ] をクリックします。  
[Servers] リストが表示されます。
4. 構成する最初のサーバを右クリックし (*CrystalReportJobServer* など)、[Destination] を選択します。

5. 以下のタスクを実行して、CrystalReportJobServer のデスティネーションファイルシステムを構成します。デスティネーションディレクトリとシステム認証情報を設定します。
    - a. [Destination] ドロップダウンリストから [File System] を選択します。
    - b. デスティネーションディレクトリを入力します。
    - c. [Use Automatically Generated Name] オプションを有効にします。
    - d. 管理者のログイン認証情報を入力します。
    - e. [Save and Close] をクリックします。
  6. 以下のタスクを実行して CrystalReportJobServer の電子メールサーバを構成し、成功したスケジュールに関してユーザに通知します。
    - a. [Destination] ドロップダウンリストから [Email] を選択します。
    - b. 以下のフィールドを指定します。  
**Domain Name** — 電子メールサーバのドメイン名を指定します。  
**Host** — 電子メールサーバのホストを指定します。  
**Port** — 電子メールサーバのポートを指定します。  
**To** — レポートが実行されたときに電子メール通知を受け取るユーザの電子メールアドレスを指定します。  
**Subject** — レポートが実行されたときに送信される電子メールの件名を指定します。
    - c. [Save and Close] をクリックします。
  7. CMC の [Server] リストから ProgramJobServer を選択し、手順 5 および 6 と同じように電子メールサーバおよびファイルシステムサーバを構成します。
  8. CMC の [Server] リストから DestinationJobServer を選択し、手順 5 および 6 と同じように電子メールサーバおよびファイルシステムサーバを構成します。
- CrystalReportJobServer、ProgramJobServer、および DestinationJobServer の電子メールおよびファイルシステムが構成されます。

## CA Business Intelligence でのプログラム オブジェクトの構成

CA Business Intelligence で電子メール サーバおよびファイルシステム サーバを構成した後、BIAR ファイルからインポートされた CMC プログラム オブジェクトを構成します。プログラムファイルは適切なスクリプトを実行します。オペレーティング システムの特権のあるユーザ ログインで起動するようにプログラムファイルをスケジュールします。プログラム オブジェクトを構成すると、CA Business Intelligence リポジトリに JAR ファイルを追加でき、またレポートのようにそれらをスケジュールできます。CA CMDB が UNIX にインストールされている場合、JAR ファイルを使用します。

### プログラム オブジェクトを構成する方法

1. Central Management Console (CMC) にログインします。  
CMC のホーム ページが表示されます。
2. [Manage] 列の [Applications] をクリックします。  
[Applications] リストが表示されます。
3. CMC を右クリックし、[Program Object Rights] を選択します。  
[Program Object Rights: CrystalEnterprise.Program] ページが表示されます。
4. 以下のオプションを有効にします。
  - a. [Run scripts/binaries] を選択します。
  - b. [Run java programs] を選択します。
  - c. [Use impersonation] を選択します。
5. [Schedule with the following operating system credentials] オプションを選択し、ユーザ名とパスワードを入力します。
6. [Save] をクリックします  
プログラム オブジェクトが構成されます。

## CA Business Intelligence で GRLoader 環境を構成する方法

別のイベントを構成する場合は、CA Business Intelligence において GRLoader を手動で構成します。指定したユーザに CA CMDB レポートを必要に応じて電子メール送信するように、GRLoader のスケジュールをセットアップします。レポートはレポートのスケジュール成功でイベントをトリガし、`BOXI_GRLoader` は XML スケジュールイベントを待ちます。

以下の情報では、Central Management Console (CMC) から統合を完了する方法の概要について説明します。

1. XML ファイルの [スケジュールイベント](#) (P. 30) を作成します。
  2. 以下のいずれかを実行します。
    - a. `BOXI_GRLoader` および CA CMDB エクスポート レポートをスケジュールします。
    - b. CA CMDB が別のコンピュータにある場合は、GRLoader を実行します。
    - c. リモート MDR から GRLoader を実行します。
- XML ファイルが生成され、XML スケジュールを実行します。これにより、`BOXI_GRLoader` プログラム オブジェクトのスケジュールを開始し、CA CMDB データベースにデータをロードします。

## リモート MDR からの GRLoader の実行

以下のいずれかの方法で、GRLoader を使用してリモート MDR から CA CMDB にデータをプッシュします。

- MDR を実行するリモートシステムから CA CMDB を実行するシステムに XML データをコピーして、CA CMDB システムで GRLoader を実行する。
- リモート MDR システム自体で GRLoader を実行する。

**重要:** GRLoader を手動で実行する場合は、「CA CMDB r12.7 テクニカル リファレンス ガイド」を参照してください。

CA CMDB がインストールされていないリモートシステムから GRLoader を実行するように準備するには、以下の手順に従います。

1. JRE (Java Runtime Environment) バージョン 6.0 以上のバージョンがインストールされており、利用可能であることを確認します。
2. %NX\_ROOT%¥java¥lib ディレクトリの内容を、CA CMDB システムから GRLoader を実行するリモートシステムのディレクトリにコピーします。このリモートディレクトリは %ROOT% という名前です。
3. %ROOT% ディレクトリに NX.ENV という名前のファイルを作成します。
4. テキストエディタでファイルを開き、以下の行を追加します。  
`@NX_LOG=path_that_contains_the_log_files`
5. %ROOT%¥site¥cfg ディレクトリを作成します。
6. %ROOT%¥log ディレクトリを作成します。

リモートシステムから GRLoader を実行するには、以下のコマンドを実行します。

```
java -Xmx512M -cp %ROOT% -jar %ROOT%/GRLoader.jar -N %ROOT% -u [userid] -s [server] -i [他の GRLoader オプション]
```

ここで %ROOT% は、ステップ 2 でコピーされたファイルが含まれている完全修飾パスです。

## BOXI\_GRLoader.jar の構成

CA Business Intelligence から GRLoader を自動スケジュールするには、*BOXI\_GRLoader.jar* ツールを使用します。この手順は、CA Business Intelligence から GRLoader および CA CMDB エクスポート レポートをスケジュールする場合にのみ必要です。UNIX または Windows に CA CMDB がインストールされている場合に、ツールを使用できます。プログラム オブジェクトを構成するときに、JAR ファイルを CA Business Intelligence リポジトリに追加するか、あるいはレポートと同じ方法でそれらをスケジュールすることもできます。BIAR ファイルをインポートした後、*BOXI\_GRLoader* プログラム オブジェクトは ¥CA Reports¥CCA to CMDB¥ フォルダに自動的にインポートされます。

1. *BOXI\_GRLoader* プログラム オブジェクトを右クリックし、[Default Settings] を選択します。
2. [Program Parameters] のフィールドに次のように入力します。

### Arguments

GRLoader を実行するときに渡す引数を指定します。

例 : -cfg C:\myconf.txt

注: パラメータの詳細、または *-cfg* パラメータを使用して構成ファイルを構成する方法については、「CA Service Desk Manager CA CMDB r12.7 テクニカルリファレンス ガイド」を参照してください。

**重要:** CA Business Intelligence で GRLoader を実行するようにパラメータを設定するときは、GRLoader コマンドのオプションとして *-slump* を渡さないでください。slump ポートは CA Business Intelligence サーバには存在しません。

以下の例では、CA Business Intelligence から GRLoader を実行するために最低限必要な引数を示します。

```
-s http://<ホスト名>:<ポート> -u <ユーザ名> -p <パスワード> -i <入力ファイルのパス> -n -a -N <%ROOT% のパス> -E
```

### 作業ディレクトリ

GRLoader ライブラリ ファイルをコピーしたディレクトリを指定します。

例 : %ROOT%

### Class to Run

実行するラッパー クラスを指定します。

例 : cca2cmdb.BOXI\_GRLoader

### クラス パス

システム内の GRLoader.jar の場所、および GRLoader に関連するすべてのライブラリ JAR ファイルをコピーしたディレクトリを指定します。

例 : C:\MyGRLoaderLib\GRLoader.jar

**重要:** CA Business Intelligence をインストールしたコンピュータで CA CMDB を使用できない場合、ファイルをコピーする必要があります。

3. 左ペインから [Program Logon] を選択し、ログイン認証情報を入力します。

これらの認証情報では、前にプログラム パラメータで指定した作業ディレクトリおよび JAR ファイルにアクセスするために使用したオペーレーティング システムを指定します。

4. Crystal Reports Job Server で電子メール送信先を有効にしたことを確認し、左ペインから [Destination] を選択して以下のタスクを実行します。

- a. [Destination] ドロップダウンリストから [Email] を選択します。
- b. [From] および [To] フィールドに、電子メールアドレスを入力します。
- c. [Subject] として 「**CMDB Export Report**」 と入力します。

5. [Save and Close] をクリックします。

正しい引数で実行するように、BOXI\_GRLoader プログラムが構成されます。

## GRLoader プログラム オブジェクトのパラメータ

conf.txt ファイルを介して引数を提供できます。conf.txt ファイルで定義されているフィールドを以下に示します。

- grloader.userid=xxxx
- grloader.password=xxxx
- grloader.server=http://hostname:port
- grloader.inputfile=C:\\temp\\abc\\example
- grloader.nxroot=xxxx
- grloader.allowupdate=yes
- grloader.allowinsert=yes
- grloader.overwriteerrorxml=yes

〔Argument〕 フィールドに引数を直接入力することもできます。以下の例では、CA Business Intelligence から GRLoader を実行するために最低限必要な引数を示します。

```
-s http://<ホスト名>:port -u <ユーザ名> -p <パスワード> -i <入力ファイルのパス> -n -a -N  
<%ROOT% のパス> -E
```

### ホスト名

CA CMDB がインストールされているホストの名前を指定します。

### ポート

CA CMDB サーバが実行されているポートを指定します。

### ユーザ名

CA CMDB サーバにログインするためのユーザ名を指定します。

### パスワード

CA CMDB サーバにログインするためのパスワードを指定します。

### 入力ファイルのパス

CA Business Intelligence レポートを実行することによって生成されたパスおよび XML ファイルを指定します。

### %ROOT% のパス

GRLoader をコピーした場所を指定します。

注: GRLoader に渡すことができる引数の詳細については、「*CA CMDB r12.7 テクニカルリファレンスガイド*」を参照してください。

## スクリプト

統合に含まれるスクリプトは、機能の最も重要な部分です。スクリプトを正しく作動させるには以下の情報を考慮します。

- 他のすべてのアクティビティの前にスクリプトをまず実行します。
- スクリプト実行で必要なデータベース オブジェクトが作成されることを確認します。
- ユーティリティに関連するエラーをトラブルシューティングするには、BIConfig フォルダにある BIConfig.log ファイルを参照します。
- JAVA\_HOME 変数設定に BIConfig ユーティリティの場所が含まれることを確認します。
- CAFApp.log ファイルを表示し、CAFPage の実装に関連するエラーを追跡します。このログファイルは、CA Business Intelligence インストールの Web アプリケーション サーバのログ フォルダにあります。